
箱庭の中

In the World of Servant

麻道 傾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の中 In the World of Servant

【Nコード】

N0770M

【作者名】

麻道 傾

【あらすじ】

ある晴れた日。

漠然とした憂鬱を抱えていた少年は奇妙な老人と出会う。

老人との会話の後、前触れもなく意識を失った少年が次に目を覚ましたとき、彼は記憶を失い、馴染みのない世界にいた。

当たり前のように奴隷の存在が認められているその場所で、自らを少年の奴隷だと言う白い少女と出会い、一つ屋根の下で生活するこ

とになったのだが……。

天気は晴れだ。見上げた空は半分が青色で半分が白に近い灰色。空の八割が雲に覆われなければ天気は曇りではない、などと割とどうでもいい理科の知識を再確認する訳だがこれといって利益はない。彼は学校までの道のりをゆっくりと歩きながら一日の始まりに憂鬱になる。別に理由があるのではないのだが、なんとなく憂鬱なのだ。

授業は嫌ではないし、友人関係も上手くいつていると自負しているが、漠然と学校に行きたくはないと考えている。と言うよりも生きることに對してそれほど熱心ではない事がそもそもの原因なのだが、彼本人はそれに気付いていない。

登校路の半分ほどを消化して差し掛かる、然程大きくもない十字路の中心にその老人は立っていた。髪はほとんど白一色に染まり、頬は痩せこけている。

それだけなら別段気に留めることもなかっただろう。そんな人間は探せばいくらだっている。彼は活発な好青年ではないし、まして律儀な社会人などという存在とは程遠い。だから挨拶なんてするはずがなかった。普段なら。

「おはようございます」

しかし、彼の口は老人への言葉を紡ぎ出していた。無意識に、という訳ではない。言葉は意図的に吐き出したものだ。老人の視線が何故かこちらに向けられているようだったので、仕方なく外面を愛想の良い笑顔で取り繕っただけで心の籠こもっていない挨拶をした。

気に入らなかった。無性に腹が立った。感情の原因は自身の態度だという事は解りきっていたが、素直に認められるほど大人になってもいない。苛立たしさは外に出ることなく霽ものように溜まっていた。

「おはよう」

老人は無表情のまま応えた。その視線は、遠くからだと彼に向けられているようだったが、近づくにつれてその先にあるものが彼ではなく何処か遠い虚空であるような印象を受ける。まるで全てモノに対する興味が失せてしまった者の瞳のようだ、と脈絡もなく思った。

「君には願いがあるかね」

老人に問いかけられたのは、隣を通り過ぎようとしてちょうど肩が並んだ時だった。

「願いは？」

首だけで振り返って、鸚鵡返しをした。声は少々低く、眉根は寄っていた。

「そう。願いは？」

彼の不機嫌そうな態度に気付いていないのか、老人が物怖じすることはなかった。それどころか、こちらに向けられている視線が交錯する事すらない。なんとなく腹立たしかった。

「あなたに話して何の意味があるってんだよ」

具体的な願いやなど思い浮かばなかったが、反発した。そんな自分が腹立たしかった。

これ以上この老人に関わるのはやめようと思った。感情の矛先が変わる前に、持て余した感情の捌け口が外部に作られる前に、立ち去ろう。

「願いはあるかね」

老人は初めの問いを繰り返すだけで彼の質問に答えることはなく、ゲームのNPCと会話しているような気分になった。

苛立ちが募る。質問を無視された事が腹立たしかった。視線を合わせようと思わないのが気に入らなかった。なによりも、他人の心に土足で踏み込んでくるような態度に吐き気がした。どうしてこんなにも苛立つのか分からない。半分は八つ当たりのようなものだ。だけど、その言葉が引き金を引いて

「願いはあるかね」

キレた。

「俺を解放してみろよ！！」怒鳴った。

何から、とは言えなかった。自分でも分からない。老人に出会った事による苛立ちからか、憂鬱な毎日からか、それとも全く別のモノからなのか。個人を縛る鎖は視えないだけで無数にあるものだ。「よかるう」

老人の声と同時に、彼の意識は闇に堕ちた。

人が倒れる音がすると、老人は無表情を崩して歩き始めた。その些細な変化に気付く者がいたとしても、変化の意味を汲み取れる者はいないだろう。

苦笑に近い失笑に似た表情の老人は、十字路から姿を消した。

prologue - a (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

基本的に不定期更新でいきたいと思いますが、一週間に一度くらいは頑張ります。

ド素人で文章も拙いかも知れませんが、これからよろしくお願いします。

銀髪の少女は黒いローブを纏った魔術師然とした男に連れられて石で組み上げられた廊下を歩いていった。長く続く先の見えない道に窓はなく、所々に付けられている松明の灯りも心許ない。陰鬱な雰囲気と先に待つ暗闇に、少女の心は飲まれそうになっていた。

「あの……どこまで歩けば」

「静かに歩け。『ハーフ』は黙っている」

「……………はい」

不安を払拭しようとして男に質問を投げかけた少女だったが一蹴されるだけだった。

少女は歩きながら自分の腕に取り付けられた白い腕輪を見た。その腕輪は奴隷の証だ。一年ほど前に人攫いにあつて売り飛ばされ、身分を奴隷に落とした少女は『ハーフ』と呼ばれるようになった。『ハーフ』とは彼女のように何らかの理由で身分を落として奴隷になった者を指す言葉である。人生の一部を人間として過ごし、残りを奴隷として過ごす。半分は人間。ゆえに『ハーフ』。この言葉は『ハーフ』たち自らが、生れ落ちたときからの奴隷とは違うという自尊心から作った物らしい。しかし現在では人間から奴隷に落ちた、すなわち人間としての身分に見合うだけの才能を持たなかった無能、という意味で蔑むために用いられる表現となっている。

無言のまま数刻歩き続け、長かった廊下が終わり開けた空間に出た。立方体の部屋で、中心部が円形に一段高くなっている。円形の段の直径は大人の男が二人寝そべることが出来るくらいの長さで、円周上のちょうど少女の頭くらいの高さに、天井から吊るされた六つの灯りが揺れている。しかし灯りが弱いために部屋の隅まで照らされておらず、不気味さを醸し出していた。何かの儀式に使う祭壇のようだと少女は思った。

あの、と口に出そうとして少女は留まった。何を聞いたとしても

「黙っている」と切り捨てられることは明らかだった。

無言の時を立ち尽くすだけで過し、少女の我慢も限界に達して口を開きかけた時だった。

「来るぞ」

男が小さな声でぼそりと言った。何が、と聞く前に祭壇の中心がまばゆい光を発し、思わず目を閉じた。やがて光が収まりゆっくりと目蓋を上げた少女の視線の先には相変わらず不気味な祭壇とその祭壇の中心に黒い服に身を包んで眠る少年の姿があった。

ローブを纏う男は何事もなかったかのように祭壇に上がり、少女もその後を追った。少年に傍らに立つと、男は見下ろして告げた。

「これが今日からお前の主となる」

「はい」

男は懐から黒い腕輪を取り出すと少女に渡した。腕輪を受け取った少女は屈んで、少年の手を取って腕輪をつける。黒い腕輪、それは奴隷を役する者の証。

次いで少女は少年の顔を見た。自分がこれから一生仕えることになるかもしれない人の顔を脳に焼き付ける。少しあどけなさが残るが端正な顔立ちをしていて黒い髪を持っている。その服装とも相まって『黒い人』という印象だった。

「行くぞ」

男はそう言って祭壇から降りて長く続く廊下に歩き出すと、少女も少年を背負って急いでローブの男を追った。

少女は、新しい主の鼓動の音を背中に感じながら先の見えぬ道を歩くのだった。

第1話 出会い

何よりもまず初めに、これが夢なんだと理解した。理由なんて存在せず、必要ともされない。因果関係なんてものはなく、簡潔に結果だけがある。自分が何者か、すら分からなかった。ただ分からないと言う結果だけがあり、考えると言う過程は必要とされず省略される。ここでは考えるとと言う行為自体が無意味で、結果に何一つ影響することはない。そんな夢の世界。

何も考えず、考えることを必要とされず、考えることを許されず、流れに任せた。

認識する世界は青と少しの白に塗りつぶされていて、それは擬似的な空と雲だった。微細な変化が上書きされ白の雲の位置が動く。身体が宙に拘束されていると言う結果を認識する。鈍く光る銀色の鎖が、上下左右、空の彼方から伸びて身体に巻きついている。

急激に鎖が錆びていく。時間が早回しになったよう。

朽ちていく鎖は身体の表面を這い回り、擦り傷とも言えないほど軽度な痛みを残して外れ、大空に放り出される。落ちる。重力加速度ななんてものが存在しないここでは落ちる行為自体に意味がある。それは夢の世界でのリアリティの追求であり、空を飛ぶことは不可能だと知っている本能の呟き。

空気の流れ。重力の擬似軽減。様々な感覚がどこかで眠っている脳に働きかけて落下の感覚を呼び起こす。そして恐怖。現実でないと理解してないながらも身体は生きる努力をする。

が、それだけ。いくら努力をしようとも過程を経ない世界では結果に影響を及ぼすことなんて出来ない。ただ落ちる。恐怖に疎んでいる訳でもないのに肉体は動かず、結果の受け入れを強要される。生存本能を一時的に抑制。

落ちて落ちて落ちて落ちて落ちて、青い終着点を眼下に捉える。透明な液体が広がる海に頭から落ちる。

鼓膜を揺るがす大きな振動と圧力が発生して世界は変化する。冷たいものに包まれる。因果のない世界では高所からの落下で死ぬことはなく、しかし無関係に与えられた痛みは全身を暴れまわり、肺の酸素を外に送り出しながら底に沈んでいく。肺に水が入って咽むせるが出て行くのは空気とそして。

なにか大切なものが失われていく。体温が奪われる。失ったことで出来た穴を埋めるように余分なものが入り込んでくる。咽る。吐き出す。入り込んできた異物に拒否反応を示して追い出す。身体はどンドン空っぽになり意識も同時に薄れる。身体は海の底に沈み、意識は闇の底に沈む。

視界が暗闇に閉ざされる直前、必然に目の前を漂っていた錆びた鎖を見て 身体は動く努力すらも放棄している………
生存本能が壊されていることに気付く。

意識が閉じた。

夢の内容は記憶の中で曖昧に霧散する。その無数とも言えるパズルのピースは巧妙に隠され、やがて無意味な情報として廃棄されるだろう。だが今は記憶の宝箱に厳重な鍵ほとこを施されて、片隅に追いやられる。そして空いてしまった場所には新しい器が運び込まれる。少年は彼自身の願いによってその器に何も入れないことを選択して、空っぽで世界に放り出される。

少年の意識がゆっくりと覚醒する。

目蓋が開くが、光に慣れない視界が白く染まって目を細める。ベッドに寝転がったまま数度瞬きを繰り返した後、まだ覚醒しきっていない頭でぼんやりと、見慣れぬ灰色の天井を眺めていた。

「主……様？」不意に声が聞こえた。

「あるじ？」

声のした方に首を傾けると、そこには少年を見つめる白い少女がいた。まるで雪の妖精にでも出会ったような気分だった。腰まで伸びた銀色の髪、感情の乏しそうな銀色の瞳、色素の薄い肌、真っ白なワンピースのような服装、そして白色の腕輪。その少女全体が「白」に統一されているようだった。

おそらく床の掃き掃除をしていたのであろう少女は手に箒おしりを持って、たまたま彼の元に駆け寄ってきて、その無感情な瞳で覗き込んだ。

「主様、お目覚めですか」

「え？ ああ……」

少年には事態が全くと言っていいほど飲み込めていなかったが、返事は自然と口から零こぼれていた。

返事を聞いた少女は「では」と残して、ベッドから立ち去っていき。

少年は上半身を起こして、その背中に「あの……」声をかける。

「なんですか」

少女はしなやかな動作で振り返ると少年と視線を合わせた。感情をうかがわせない冷たい瞳をしていた。

「あるじって何のこと」

それは初めに感じた疑問だ。少年のことを指しているのだろうか、どうにも聞きなれない言葉だ。

「主様は主様です。いけませんか」

「いや……いいんじゃない、か」歯切れ悪く答える。

少女の言っていることは理解し難がたいがおそらく少年が立てた予想と違わないだろうと納得しておく。そして一つの疑問が解決するとすぐにまた疑問が生まれる。

「えと、なんで俺が主なの。というかそもそも、ここ何処」

少年は記憶をたどろうとしたが何一つとして思い出すことが出来ずにいる。

「へ？」

今まで無表情を崩さなかった少女が少し驚いたような顔をした。

少女はベッドに近づいて少年の傍らに立つと、少年の手を指して言った。「腕輪」

少年が指された自分の手を見ると、少女が付けている物と同じようなサイズの黒色の腕輪がはまっていた。

「で、この腕輪がどうかしたの」

「へ？」少女は再び驚いた顔になった。「知らないの？ ……知らないんですか」

「別に言い直す必要ないと思うんだけどなあ」

「いえ。主様ですから」

「まあいいけど。それで、この腕輪って何。君のその白いのとペアみたいなも見えるけど」

「本当に知らないんですか」

「まあ」

少女は無表情に戻ってしまったが、少年は何故か自分が呆れられているような気がしてならなかった。

「白い腕輪は奴隷が付ける物で、黒い腕輪は奴隷の持ち主の証です」

「つまり、どういうこと」

「私は主様の奴隷です」

「奴隷って……はあ！？ 何それ」

少年は驚きを隠せない視線を送るが、少女から返ってくるのはジトツとした視線だった。

「もういいですか」

「いや、待って」立ち去ろうとする少女の腕を慌てて掴んで捲くし立てるように詰問する。「俺は奴隷なんて買った覚えはないし、それにここ何処だよ」

箒が少女の手を離れ、床に落ちて控えめな音を立てる。

「私に怒られても……私はある人に買われて、その人に主様の奴隷となれと命令を受けたので主様の奴隷となりました。あと、ここは主様が住むことになった家の主様の寝室です」

「んで、ある人って誰だよ」

「あの、その前に手を放していただけませんか」

「あつ、ごめん」

思ったより力を込めてしまっていた手を放す。握っていた部分が赤くなっていた。元の肌が白いので余計に赤色が際立ってしまう。

少女は跡がついた自分の肌を無表情で眺めていた。

「ごめん。痛かった？」

「いえ、私は奴隷ですから」

少女は少年の質問には答えず、ただ事実を告げた。無表情で、そのことに何も感慨がないかのよう。

「私は私を買った人のことを全く知りません。では私はこれで」

少女は足早に部屋を出て行った。

ばたん、と部屋の扉が乾いた音を立てる。然程大きな音ではなかったが、少年の耳の奥で反響した。

ベッドの傍らかたわに転がったままの箒いちべつを一瞥して、「女の子傷つけちゃったな」仰向けに倒れる。

「どうすりゃいいか分からねえ……それに俺はどうしてこんな所にいるんだよ」

奴隷の女の子との接し方も、自分がベッドに寝ていた理由も分からない。問題は山積みだ。

「というか俺って誰」

今になってやっと自分自身のことを本当に何一つ思い出せないことに気付いた。

「記憶喪失かよ………寝よ」

問題は先送りにするタイプだということだけは分かった。

第1話 出会い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

”少年”が記憶喪失になっていることを出来るだけ不自然にならないように書いたつもりですが………未熟者ですので大目に見ていただけるとありがたいです。

第2話 食事中に（前書き）

注・R15の表現が数箇所出てきます。

もともとはこんなに早くR15を出すつもりはなかったんですが、暴走しました。

第2話 食事中に

睡眠から覚め、別段重い訳ではない目蓋を持ち上げる。視界に入ってくるのは灰色の天井。窓から入ってきた風が頬を撫で、髪を揺らして去っていく。

「腹減った」

少年が呟くとそれに同調するかのように腹の虫が鳴く。

ベッドから起き出し、部屋の扉へ歩き出そうとして床に転がっていた箒を蹴り飛ばした。

「箒……」

自分が傷つけてしまった少女のことを思い出す。

「そっぴや先送りにして寝ちまつたんだっけ」

床に転がっている箒を拾い上げて、その場でどう謝るべきかを思索する。しかしどう謝ったとしても「私は奴隷ですから」と返される未来しか想像出来なかった。良案と呼べるものを思いつかないまま考え耽^{ふけ}っていた所でもう一度腹の虫が鳴いた。

「まずは腹ごしらえからだな」

部屋から出て適当に歩いていると、カツカツとリズムの良い音が聞こえてきた。音の正体を想像してまた腹が鳴く。廊下を少し歩いて音がする部屋に入った。部屋の中心には四人が食事を取れるほどの大きさの木のテーブルとそれに付属する三つのイスがあり、奥は台所になっているようで白い少女が料理をしてリズムの良い音を奏でている。

「よう」声をかける。

少女は振り返って少年の姿を確認する。

「主様、ただいまお食事の準備をしております。イスに掛けてお待ちください。箒は後ほど私が片付けておきますので壁に立てかけておいてください」

始終無感情な視線を向けて言い、また料理に戻った。

気にしている様子は微塵も感じられなかったが、少女の腕にはくつきりと握られた跡が残っていた。まるでそこに赤い腕輪がはめられているようだ。

言われたとおり、少年は壁に筭を立てかけるとイスに座って、少女の後姿を眺めながら料理が出来るのを待った。

こうしていると年は若いが新婚の夫婦のようだ、と少年は思った。そして新しい疑問が生まれる。

「そういえばこの家って俺と君以外に誰が住んでるの」
少女は手を止め、振り返った。

「主様と」

「いや、いちいち手を止めてまでこっち向かなくていいからさ。料理しながら答えてくれれば」

「それでは主様に対して失礼になってしまいます」

「そういうものかなあ。でも料理の途中で目を離すのって危ないだろ。だから俺への敬意とか考えなくていいから料理優先して」

「そうですか。では質問にお答えするのは後ほどということになるのでしょうか」

「……そうじゃなくてだな。要するに、料理してるときに俺に話しかけられて、こっちに向く必要がない場合はそのまま料理を続けながら返事してくれればいいってこと」

「^{かしこ}まりました」

少女は相変わらずの無表情で応えて料理を再開したが、声色は不満そうだった。

「現在この家に住んでいるのは主様と私だけです」

脈絡のない少女の回答に苦笑が漏れ、次いでその事実を目を丸くする。

「ちよつと待て、本当に二人だけなのか」

少女は料理の手を止めて振り返ろうとして、「料理しながら、な少年の声に止まり、また料理を再開した。

「主様と私しか住んでいません」

「それって色々と問題あるんじゃないのか。その……年頃の男女が
一つ屋根の下って」

「色々とはどういう問題でしょうか。私には分かりかねます」

「色々は色々だよ。危機感ないのかよ。俺だって一人の男なんだぞ」
「主様は狼さんなのですか？」

「……狼ってお前」

「分かりませんか？ では、主様はお召し上がりになるのですか？
何を、とは言いませんが」

「……やっぱりこの話題はやめよう」

「分かりました」

そしてしばらく経ち、「主様、お食事の準備が出来ました」

少女はサラダの盛られた皿とシチューのようなものが入れられた
皿を並べ、フォークとスプーンを用意すると、少年の傍らかたわに立った。

「えっと、どうしても君の分は用意しないの」

「私は後ほど頂きます」

「別に一緒に食べればいいじゃん」

「私は奴隷ですから」

「席は余ってるんだからさ、一緒に食べればいいんじゃないの」

「私は」

「奴隷ですから？」

「……はい」

「どうしても譲れないって言うなら、これは命令。俺と一緒に食事を
を取れ」

「……畏まりました」

少女は台所に戻ると自分の分の料理を盛り付けて少年の反対側の
イスに座った。

「料理は出来立つてが美味いし、多人数で食くうのがベターなんだよ。

これ常識。分かったなら食くうか」

「はい。ではお召し上がりになって下さい」『お召し上がりに』の
部分が強調されていた気がしてならなかった。

「わざとか？」

少女は微かに不敵な笑みを浮かべた。「何のことですか？」

それは少女が少年に見せた初めての笑顔だった。

「まったく……」

言葉では呆れているものの、顔には隠し切れずに笑みが浮かんでいた。

そして食事が始まり、少年は食事についての感想を舌鼓を打ちながら述べ終えた後、切り出す。

「話を戻すけど、どうなの？ その、危機感とか。食事中に話すことじゃないだろうけどさ」

「主様が狼になるという話ですか」

「いや、だから狼って……」

「ではどのような言い方をご希望ですか？」

「ストレートなのは避けてほしい」

「十分婉曲なものだと思っんですが、狼。……では改めて、主様が私をお召し」

「ストップ！！ 今食事中。分かってる！？」

「食事中にこの話題を持ち出したのは主様です」

少女は表情こそ無表情だったが視線には呆れが混じっていた。

「それはそうだけど、大事なことでしょ。君の……その、て、貞操とかにも関わってくるものだし」

「”貞操”ごときでどもるなんて主様どれだけ初心うぶなんですか」

「ごときってお前、てて、て貞操は大切にしなきゃいけないだろ」

「主様どもりすぎです。それに男の人が貞操を語るものじゃないですよ」

「そりゃそうだけど。とにかく、危機感とか不安とかないわけ？」

「ない、といえば嘘になります……けれど私は奴隷ですから」

少女は全く悲しそうな顔をせず、無表情のままその残酷な事実を述べる。

「奴隷って言うてもさ、色々あるじゃん、人間としてさ。初めては

好きになつた人がいいとか」

「本当に食事中にする話ではありませんね。それに奴隷は人間ではありませんよ」

「……ごめん……色々」と

俯き、手が止まる。嫌なことを思い出させてしまったのだろう。

少女が人間として扱われてこなかっただろつこともそうだし、こんな年頃の少女の奴隷なら”その行為”に嫌な思い出があるのは必然だ。好きでもない男性と体を重ねたことだつてあるかも知れない。

「主様、顔を上げてください。料理は美味しく食べないといけないのでしょう?」

「ああ、そうだな」食事を再開する。

「それに……」

「奴隷ですから?」

「いえ、そうではなくて私は……生娘ですから」

「ぶつ」吹いた。げほげほと咽る。お、お前、生娘つて、げほつ、そんなの俺に言つていいのかよ」

少女は無表情のまま首を傾げて言う。「何か問題ありますか。やっぱり主様は狼さんでしたか」

「ちよつと待て。そこは否定させる。俺は断じて狼などではない」

「ならなんで動揺したんですか。主様が心配なさつていた貞操はしつかりと守られていることも分かつて、むしろ安心するものとはかり思つていました」

「それは……」

「別に構いませんよ。私は主様が狼でも。奴隷ですし。存分にご使用下さい。まあ、”初めて”と”貞操”が一気に奪えるという豪華二大特典付きですが」

「……」沈黙が流れる。

さすがに少女も言いすぎたと思つたのか遠慮がちに声をかける。

「あの、主様?」

「……もういいや、この話はここで終わり。俺は君を襲いません。」

以上」

少年に怒りは一欠片もなかったが、脱力感が漂っていた。

少女が生娘でいられる理由の一端を垣間見た気がした少年であった。

第3話 名前（前書き）

第3話にしてやっと主人公の名前を出すことが出来ました。

第3話 名前

「あのさあ」

食器やら料理に使った道具やらを洗っている、白い少女の背中に声をかける。

少年の本音としては自分も後片付けに参加しなければ気が済まないのだが、少女が断固して譲らないため手伝うことも出来ず、部屋に戻っても手持ち無沙汰、そして手を強く握ってしまった件についての謝罪も出来ているとは言い難いため、仕方なく少女の片付けを後ろから眺めるだけという現状に甘んじていた。

「なんでしようか、主様」少女は洗い物をする手を休めて振り返る。「料理のときも言ったけどさ、いちいち振り返る必要ないよ」

「しかし料理と違って中断することによる危険はありません」
「それでも。俺への敬意とかどうでもいいからさ。作業効率優先。料理も掃除もそうだけど、必要のないときは作業を止めてまで俺の方を向いて応える必要ないからね」

「……畏まりました」

少女は渋々といった様子で洗い物に戻った。

「でさ、気になったというかさ。俺って未だに君の名前知らないんだよね。いつまでも『君』って呼ぶのは、一緒に暮らす身としてちよつと他人行儀過ぎると思うし。嫌じゃなかったら名前教えてくれない」

「名前なんてありませんよ」

少女はあっけらかんとした様子で告げた。

「え？」

「私は名前を持っていません。奴隷は名前を捨てるものですよ。…

……本当に何も知らないんですね」

「ということは君も名前を捨てたの？」

「もちろんです。主様、奴隷は人間ではありませんよ」

「そりゃそうかもしれないけど、でも人間じゃなくったって名前くらゐあるだろ。奴隷になる前の名前を名乗ったっていいじゃないか」「主様、何度も言いますが奴隷は人間ではありません。人間は奴隷に身を落とした時から別の存在となります。だから人間であったときの私と今の私は別の存在。過去の名を使うことも、教えることも出来ません」

「……………いくら奴隷だからって、そんなの酷いじゃないか」

名を捨てるということは自分を捨てるということだ。奴隷になるのだから自分を捨てるのは当たり前のことなのかもしれないが、過去を否定されるといふのは酷だろう。

「主様が何に心を痛められているのかは分かりかねますが、名を捨てるというのは当然のことですし、未練があつた訳でもありません」

「でも、納得いかないものは納得いかないんだよ」

「納得いかなくても事実です。それに主様に見れば他人事ですよ。勝手に同情なさるのなら止めはしません、気に入られないならば名をお与えになってはいかがですか？ 識別する必要がある奴隷は主から名を与えられるそうですので」

「俺が名前を……………？」

「はい。何であつても構いません。たとえば『キミ』とかでも」

「くくっ」

少女の場違いな軽口に苦笑が漏れる。身勝手な勘違いかもしれないが、少年を氣遣つて重い雰囲気を払拭しようとしてくれたのかも知れない、と嬉しくなる。

「では私の名前は『キミ』ということでは？」

「いや」

「なんででしょうか、主様」

「君の名前は『ハク』だ」

「『ハク』ですか」

「そう『ハク』。なんかさ、君って全体的に白って印象だから、『ハク』。反対意見ある？」

「いえ、ありません。では私は今より『ハク』と名乗らせていただきます」

「じゃあさ、ハク」

「なんでしょうか、主様」

「俺にも名前付けてくれないか」

「へ？」

少女は思わず振り返って、真意を汲み取るうと少年を見つめた。

「どういうことでしょうか」

「そのままの意味だけど……俺、自分の名前覚えてなくてさ。記憶喪失ってやつみたいなんだ」

「はあ。それは分かりましたが、何故私に名前を付けると仰ったのですか」

「特別な意味はないけど、強いて言うなら名前を付けたお返しかな」

「そうですか。私は主様が付けると仰られるのなら構いません」

「じゃあお願い」

「では『コク』というのはいかがでしょうか」

「『コク』？」

「私が白という印象なら主様は黒い人という印象です」

「それってどういう意味？」

「えっと、腹黒ですね。初心と見せかけて実は狼さんという」

「ちょっと待て。俺は狼じゃない。断じて違うぞ」

「……冗談ですよ、主様」

「はい？」

「だから冗談です。腹黒というのは。主様が冗談の通じない方だと知りもせずにござけてしまい、申し訳ありませんでした」

「いや、冗談ならいいんだけどさ。で、本当の理由は？」

そこはかとなく馬鹿にされている気がしないでもない少年だったが、そのことを口にする事はなかった。

「眼も髪も服装も黒色ですし」

「ああ、そう。だから黒い人なのか」

「はい……お気に召されなかつたでしょうか。なら新しいものを」

「いや、いいよ。『コク』で」

自然と頬が緩んでしまうのを感じた。

「そうですか。ありがとうございます、主様」

ハクはちようど洗い物が終わったようので、振り返って頭を下げた。

「こんなことで感謝されてもな。それよりも俺のことは『主様』じゃなくて『コク』って呼んでくれ」

「そんな！？ そんなこと私には出来ません。主様の名をお呼びするなんてこと」

「うーん。何が問題なのかいまいちよく分からないけど。じゃあ命令。俺を『コク』と呼ぶこと」

「うつつ………畏まりました。あるじ………コク様」

「それでよし。まあ、『様』は妥協するか」

「はあ………では私は食器を片付けないといけませんので」

「あつ、ちよつと待って」

食器、調理器具を持って行こうとしていたハクを呼び止める。

「なんででしょうか、コク様」

「腕のこと、その、大丈夫？」

謝ろう謝ろうと思つて、なかなか実行できなかつたことをやっと言い出す。

「そのことなら平気です。問題ありません。跡もすぐに消えるですよ」

「大丈夫ならいいんだけど、ごめんね、本当に」

「コク様、どうして謝られるのですか。私は奴隷ですよ」

「いくら奴隷って言っても痛みを感じない訳じゃない。同じように痛いはずだろ。相手に嫌な思いをさせたら謝るのが当然じゃないか」

「私は奴隷ですから」

「………奴隷奴隷って、なんなんだよ奴隷って。奴隷だからってなんでそんなに我慢しなくちゃいけないんだよ。奴隷だつて人間だろ」

「いえ、奴隷は人間では」

「そうじゃない。ハクのその身体は人間のものだろ。ただ立場が違うだけで、なんで、そんな」

「違います、コク様。奴隷にとって人間であることは罪なのです」

「……罪ってどういうことだよ」

「奴隷になるような人間は皆、弱者か罪人です。借金を負っていた者、人攫さらいに遭った者、奴隷の親から生まれた子供、罪人ではない奴隷は例外なく弱者なのです。そして弱者であることは罪です」

「弱者であることが罪って……弱者は助けられるべき存在だろ」

「コク様にとつての常識が如何いかなるものか分かりかねますが、弱者は切り捨てられるべき存在ですし、弱いものを助けなければならぬというコク様の考えは驕おごりです」

「……………」

「コク様は何に戸惑い、何に憤いきどおっているのですか？ 奴隷という制度にですか？ 奴隷を言い訳にしている私にですか？ それともご自身の罪悪感にですか？ ……私はこれで失礼させていただきます。生意気言って申し訳ありませんでした」

ハクは食器を棚に片付け、壁に立てかけられた箒を手にとると、足早に部屋を立ち去っていった。

コクは立ち尽くし、ハクに言われたことの意味を噛み締めていた。自分には記憶がない。だから自分の常識とハクが育ってきたこの場所の常識がどれだけ違うのかなんて見当もつかない。

確かにハクの言っていることは正しい。人間以外の世界なら弱者は切り捨てられる存在だ。弱肉強食なんて当たり前。俺はハク一人を助けることも出来ないのに理想を常識として語って、驕おごっていた。ハクに言われたとおりだ。

俺は奴隷制度に苛立いらだち立たって、その制度に納得しているハクが気に入らなかつた、同情していた。

そして俺が謝ろうとした理由は単純明快で、ハクに許してほしかったから。ハクに許してもらって、俺を苦しめる罪悪感から解放し

てほしかった。

結局は独りよがり。自分の都合をハクに押し付けているだけだった。

「せっかく仲良くなれたと思ったのに。溝みぞを広げちまったな」

コクは部屋を立ち去り、自室に向かう。

「仕方ない。寝るか」

相変わらず問題を先送りにするコクであった。

第3話 名前（後書き）

正直、コクって名前は微妙だと思います。

ツカサって候補も合ったんですけど、ハクという名前と対応させたかったのでこちらにしました。

（ハクの主 つかさど ハクを司る ツカサ 司）

テスト週間中にもかかわらずこんなことをやっている救いよつのない麻道ですが、これからもどうかよろしく願います。

第4話 まどろみの中で（前書き）

今回は短めです。

第4話 まどろみの中で

廊下を歩いて自分の部屋の前に達し、ちょうどドアノブを握ろうとしたところで扉が開いた。

「ごん、という鈍い音と共に額にぶつかる。

「痛っ」

一歩二歩と後ろによろけてぶつけた箇所を押さえる。

「あ、主様！！ 申し訳ありません大丈夫ですか！？」

ハクが慌てて駆け寄り、問いかける。言葉とは裏腹に無表情で、
だが。

「申し訳ありません。主様がいらっしゃることに気付かずに」

「あ、いや別に大丈夫だし、いいんだけど。それよりも、な・ま・え」

「『名前』……？ 申し訳ありません」頭を下げながらそう言つと、

「コク様、ですね」

「ああ。それで、部屋の掃除か？」

ハクの持つている筭を一瞥する。

「はい。まだコク様のお部屋は掃除させて頂いてなかったの
目覚めてすぐの一件が脳裏を過ぎる。

「ごめんな、ハク」

「何がですか」

ハクは相変わらず無表情のままに首を傾げる。

「あー、まあ気にしないでくれ」

「はあ、そうですか。では私はこれで」

ハクは一礼すると、廊下を歩いていった。

が、数メートルの距離が開いたところで綺麗な”回れ右”を行つて、部屋に入ろうとしていたコクの元に戻ってきた。

「あの、コク様」

「ん？ どうかしたか」

部屋に半歩踏み入れた状態で、ハクに向き直る。

「大したことではないのですが、私は、この廊下の突き当たりにある部屋を使わせて頂いております」

「そう。で、それを俺に話した理由は？」

「えっと……禁則事項です」

無表情で言うには無理がある台詞だと思つ。

「……………」

「……………」

「あー、ハクさん？」

俯うつむいているハクに声をかける。

「……コク様。やり直しさせていただいてもよろしいですか」

「いや、いいけど。……もう一回言い直したほうがいい？」

「はい。よろしく願います」

ハクは神妙な顔で頷いた。

「じゃあ言うぞ。……………部屋の場所を俺に話した理由は？」

ハクは無理矢理な作り笑顔を浮かべた。明らかに両頬が引き攣つってしまっているのは見ていて痛々しい。

「禁則事項です」

「……そういう問題じゃないと思つ」

「……すみません。……………以前の主様は『使えるネタだから覚えておけ』と仰っていたんですが……コク様には通じなかつたみたいですね」

相手の問題ではないと思つ、と抗議したかつたコクだが、話が抉こじれると面倒なので流すことにした。

「で、本当の所はどうなの。理由」

「へ？ まだ続ける気ですか」

心底驚いたというような声色だった。顔は無表情に戻っていたが。

「いや、だつて、理由聞いてないし」

「……………秘密です」

「それはないだろ!？」

「冗談です。コク様に部屋を使う許可を頂きたかったのと、お知らせしておいた方が色々と便利かと思ひまして。その、色々」と

「部屋を使うのは問題ないけど。何故『色々』だけ二回言ったんだ？ ハク」

「色々あるだろうと思ひまして。決してコク様の狼疑惑が晴れていない、という理由ではありませんよ。でもその色々あるでしょうし。出来るだけ早めにお伝えした方がよろしいかと」

「なあハク。いい加減にその話題はやめにしないか」

「何のことでしょうか。私は豪華二大特典のことが心配だとか、コク様には用心しないと、とか全く思ひていませんよ。むしろコク様はチキンな方なのではないか、もしくはアブノーマルな趣向をお持ちなのではないか、と疑ひております」

「俺、すごく馬鹿にされてる気がするんだけど」

「気のせい、または空耳でしょう。きつと」

「ああそう」

「ではこれで失礼します」

ハクは一礼して去つていった。

部屋に入り、扉を閉めて一言。「なんなんだ、あいつ。意味分からん」

ベッドまで歩いて倒れこむ。

脇にある窓を見ると、既に外は暗くなつていた。思はず欠伸あくびが出る。十分な睡眠時間はあつただろうがコクの身体は未だ休息を求めているようだ。

もそもそと移動してベッドの中央で仰向けになる。

部屋に明かりはなく、灰色の天井があつた場所には暗闇が居座つている。目を閉じると視界はより純度の高い黒へと染まつた。

意識を飲み込む暗闇に白い姿が映し出される。白い少女はコクを持つ数少ないエピソード記憶の一つで、記憶に存在する唯一の人間。ハクの夢を見るといふのは必然なのかも知れない。

滅多に表情らしい表情を見せない少女は何を思い、何を感じているのだろう。

コクは記憶喪失であるが失ったのはエピソード記憶だけで、知識まで失っているわけではない。

だから知っている人間が自分を除けばハクだけだったとしても人間がどういふものなのかは理解しているつもりだ。

ハクは無表情が過ぎていることだって分かる。その無表情は生来のものなのか、それとも奴隷としての生活の中で培つちかわれていったものなのか、コクには分からなし、それについて干渉するつもりもない。

ただ、ハクがいくら無表情であったとしても、人間として認められていない奴隷であったとしても、感情はしっかりと持っているはずだ。

コクの奴隷に対する知識のなさに驚いたり呆れたり、料理をしなから質問に答えると言われて不満そうな声を漏らしたり、料理を褒められて微かに頬ほを綻はべせたり。コクを怒鳴ることだってあった。

ハクは決して感情を持っていないのではない。自分の気持ちを表に出していないだけ。ちゃんと喜怒哀楽がある。

けれど奴隷という鎖で縛りつけ、感情を抑え込んでいる。

不可解なことがあるとすれば、コクに対して怒ったり、逃げたりしたすぐ後に何事も無かったかのように接していることだが、それも奴隷ゆえなのだろう。

コクは自問する。自分はハクに何を感じているのだろう。同情？ 苛立ち？ 罪悪感？ それとも全く別の何かなのか。分からない。複数の感情がもやもやと渦うず巻まいている。

確かなことは、コクがハクを奴隷だとは思っていないこと。言葉の上では理解している。だがコクにとつては一人の少女であり、主従関係に拘こわられた気持など欠片かけらもなかった。

奴隷という存在がコクの常識から逸脱いつだつし過ぎていたことも主要な原因だが、ハクの奴隷らしからぬ態度もやはり原因の一つである。

体罰を受けただけで仕事を放り出して主人から逃げる奴隷、主人を怒鳴りつける奴隷、主人と必要以上の会話をする奴隷。そんな奴隷はまずいない。いたとしてもその末路は残酷なものであるだろう。しかしハクは一切のお咎めとがを受けていない。

二人の関係は主と奴隷のそれではなく、さながら男尊女卑が確立されている兄妹程度のものでしかない。

だからという訳でもないが、コクの中では、ハクは使うべき奴隷ではなく、守るべき少女だという認識が強くなっていった。

やがて黒き少年は深い眠りに落ちていく。その胸の内に白き姿を秘めながら。

第4話 まどろみの中で（後書き）

前半はネタです。

……才能ないのは分かってます。大目に見てください。

後半はコクの考察です。

面白くないですよね。

それでも、麻道はこんなものしか書けないんです！

……すみません。精進します。

テスト前日にこんなものを書いている麻道は本当にダメ人間です。
次話は土日か、テスト明けの水曜くらいになると思います。

第5話 少女の想い（前書き）

今回はハク視点です。

第5話 少女の想い

時は少しだけ遡る。さかのぼる。

ハクは一礼するとコクの元を去った。

コクの部屋の扉が閉まる音を聞きながら廊下を歩き、物置に行く。そこで箒など掃除道具を片付けて、やっと一日の仕事が終わった。「ふう」息が漏れる。

いくら家が小さく、住む人が二人しかいないとはいえ、掃除や料理などの家事全般を一人でこなすというのは慣れない身体には堪えこたえるものだ。

物置から出て、今度は自分の部屋に向かう。廊下には明かりは無く、ただ窓から入ってくる月明かりが淡く照らしているのみ。しかし視界が悪い中でもハクの足取りは鈍ることはなく、曲がり角も壁にぶつかることもなく平然と進む。それはやって来て間もないはずのこの家の間取りを正確に把握しているかのようだ。

自室に入ると服を着替える間も惜しんでベッドに倒れこむ。本当は寝巻きが用意されているのだが、通常奴隷はそんなものを着ないし、着る気力も失せていた。ハクを買った人は侍女の真似事をさせたいらしく、人間と同じ水準の生活を保障してくれた。

目を閉じて暗闇に身をゆだねる。

「そついえばコク様に場所教えるの忘れてた……」寝巻きの場所を教え忘れていたことに気付いたが、今更伝えても既に手遅れかもしれない。

ふと疑問が過ぎる。コク様はこの出身なのだろうか。奴隷に関する知識が皆無だったのは記憶喪失のためか、それとも奴隷の文化がない地域の出身だからなのか。

分からない。

分からないが、そんなことは奴隷の自分には関係がないことだ。

”ハクのその身体は人間のものだろ
彼の言葉が蘇る。

確かにそれも一面では正しい。しかし人間と奴隷は決して同じではない、同じものとして扱われてはならない。義務を果たせなかった弱者や罪人　奴隷は権利を行使してはならないのだ。

『では義務とは何だ』

誰かに囁かれた気がした。

慌てて目を開けて確認するが、月明かりに照らされた部屋に浮かび上がる人影はない。もう一度目を閉じる。

どこからともなく聞こえてきた言葉。『義務とは何だ』

知らない、分からない。

そんなことは奴隷の私を知る必要はない。考えることに意味もない。

私は奴隷になった。それが事実。

私が弱者だった。それも事実。

奴隷になる過程がどのようなものであったとしてもそれは変わらない。弱者だったから奴隷になったという単純な結論がある。

だからこれ以上何も考える必要はない。何も考えてはならない。

私は奴隷だから。考えてはならない。

もし考えて、それで結論が出てしまったら、今まで自分を支えていたモノが壊れてしまうような気がした。

奴隷だから仕方ない。そう自分に言い聞かせて生きてきた。何度も何度も呪文のように。奴隷になった日からずっとずっと、いつもそのことだけを考えていた。

なのにどうして私に人間としての生活をすることを強いるの？
どうして私を奴隷として扱ってくれないの？

ここで甘えてしまったらもう奴隷として生きていくことが出来なくなる。奴隷だから仕方がないと必死に言い聞かせてきたのに、その支柱を壊されてしまう。でもコク様はそれを望んでいて……。

気持ち揺れ動く。奴隷として生きてきた日々の中で今日ほど楽

しかった日は他にない。人間として扱ってもらえただけで、人間だったときの私が感じたどの喜びよりも、嬉しかった。けれど私は奴隷。

確かに、今日の私の行動は明らかに奴隷の範疇を超えていた。しかし私はコク様の「人間として振舞ってほしい」という期待に応えただけ。

……違う、それは言い訳。引き金を引いてしまったのはコク様の態度であることに違いはないが、私の中に人間として生きたいという気持ちが燻ぶっていたのも理由の一端。

人間として生きたい。コク様は許してくれるだろう。しかし私自身が許せないし、なによりそれは赦されないことだ。

コク様が奴隷がどういうものか理解すれば、きっと奴隷である私に対する見方も変わる。それまでの辛抱だ。

私は奴隷だからコク様の期待には応えなければならぬ。しかし、それと同時に人間として生きることは出来ない。

コク様が奴隷と言うものを理解するまで。それまで私は人間侍女として生きよう。決して奴隷だということは忘れずに。

そう決意して　　白き少女は夢の世界へ落ちていく。その胸の内に黒き姿を秘めながら。

ハクは夢を見る。それは幸せな夢などではなかったが、奴隷になつてから見る数少ない悪夢以外の夢。それは今の主と初めて対面したときから始まる夢。

目の前は唐突に白い光に包まれる。

慌てて目を閉じ、光が収まると目蓋を上げた。すると、直前まで何もなかった祭壇のような場所の中心には黒い少年が横たわっていた。御伽噺おとぎばなしの中でしか存在しない魔法を見ているかのようだった。

隣に立っていた男が祭壇に上り、少年へと歩いていく。それを追いながらも、もしかしてこの男がさっきの光を引き起こしたのではないかと勘ぐってしまう。男が羽織っている黒いローブが魔術師や魔法使いといったものを起草させるのも原因の一つだった。

少年の傍らに立つと男から黒い腕輪を差し出される。受け取ると、屈んで少年の手を取り、はめた。このときが少年が正式な主になった瞬間。

少年に腕輪がはめられたのを見届けると、男は踵を返して長い廊下を引き返して行った。急いで少年を背負い、男に続く。男が歩く速度は来たときのそれと変わらない。人間が奴隷に合わせる必要などないのだ。奴隷が人間に合わせなければならぬ。

奴隷としての生活で重労働を重ねてきたとはいえ、寝ている人間一人を背負って歩くのは予想外に疲れる。しかし代わりに、来るときほどの不安はなかった。それは終着点がどこか分かっているからであり、背中に温かみを感じているからでもあるだろう。

やがて道の先に松明たいまつの明かりではない強い光が見えた。外の太陽の光だ。

それから少し歩き、やっと外に出て、いきなり強くなった光に目を細めた。目が慣れ、見渡すと自分達を取り囲むように生えている木々が、そして振り返ると、薄暗い洞窟のような道がある。来たときには気付かなかったが、木々が洞窟を避けて生えているようにも見える。

不気味に感じ始めると、洞窟は山肌に作られた口のように見えて怖くなった。もう二度と来ないことを切に願う。

「おい行くぞ」

声を掛けられて気付く。こんなことをしている場合ではなかった。男が歩き出したので、それを追って木々の間を縫うように進む。先程の道とは違って整備されておらず足場が悪いために疲れが溜まる。

数分歩き、林を抜けて街道に出る。馬車三台がすれ違えるほどの

大きさを持った道で、その脇に一台の馬車が止まっていた。馬車の御者の席には齡六十ほどの老人が座っており、こちらに気付くと、降りてゆつくりと歩いてきた。年のわりにその足取りはしっかりとしている。

「お帰んなさい、旦那」

「ああ」男が返事をする。

「それで、そつちの奴隷が背負っている子は？」

「ああ。こいつはこの林の奥に住んでいる私の友人の子でね。少しの間預かることになったのだ」

「そうですか。それにしてもこんな林の中に住むなんてよっぽど物好きなんでしょうね」

「ああ、まったく。私も変わった友を持ってしまったものだよ」

男は明らかに嘘をついていたが、そんなことは自分に関係のないことだ。訂正する権利もないし、必要もない。

「ところで旦那。次はどこへ行けばいいんでしょうか」

「ナギルまで頼む」

その単語を聞いた瞬間、驚いて男の顔を見上げる。ナギルという村の聞き覚えは嫌と言つほどであった。

「ナギル村ですかい？」

「ああ」

「分かりました。では」

老人は男を馬車へと招き入れる。次いで自分も馬車に入る。男が座っている席の逆側の席に少年を横たえ、自分も座る。席の幅はそこまで広いというわけではないので、所謂いわゆる膝枕のような体勢になつてしまったが仕方ないだろう。

馬の鳴き声が聞こえ、馬車が走り出した。

腿の上で眠る少年に視線を向ける。あどけなさが残る少年が安らかに寝息を立てている様はなんと保護欲をそそるものだった。無意識のうちに少年の黒髪を撫でていたが、そのことを対面に座る男が注意することはなかった。

馬車に揺られながらという環境はお世辞にも心地よいものとはいえなかったが、少年の髪を撫でる行為に心が満たされていくのを感じていた。

小一時間ほど経ち、御者の老人が男に話しかけた。

「旦那、もうすぐ着きますけどどの辺りまで行けばいいでしょうか」
男はそれに対して細かな指示をする。その地名もやはり聞き覚えのあるものだった。

そして数刻の後に馬車が止まった。少年を背負って馬車の外に出る。見覚えのある家がそこにあった。

後ろから男に声をかけられる。「ここが今日からお前とその少年が住む家だ。金と必要なものはここにおいておく。好きに使え。一カ月後にまた来る」

傍らに物が置かれた音がしたが、それは意識の外に追い出されていた。

男と御者の老人が話す声や馬車が走り去っていく音も聞き流した。ただ目の前に広がる光景だけを見ていた。もう二度と来ることはないと思っていた家。

それは自分が生まれた家であり、自分が育った家であり、人間としての自分が終わった家……。呆然と見つめていた。

そこで辺りは暗闇に包まれ、夢は終わる。

第5話 少女の想い（後書き）

ハクが何を思っているのかと、「prologue - b」の続きを書いてみました。

夢の中での事なので、状況説明よりもハクがどう感じたのかを優先したつもりですが、これで書けているかどうか……。

麻道的にはハクはヒロインというよりも、もう一人の主人公ですね。

なので、これからもコク視点の話とハク視点の話が出てくると思います。

第6話 初対面の再会（前書き）

「井戸」の記述に関しては深く考えないで下さい。

麻道は本物の井戸を見たことはあるが仕組みは知らない人なので、実際の井戸と比較すると矛盾があるかも知れません。

第6話 初対面の再会

朝。窓の外で鳥が鳴き始めてしばらく経った頃、ハクはその目蓋をゆつくりと持ち上げた。眠気は身体に根強く残っているが奴隷が惰眠を貪るといふ訳にはいかない。

起き上がって自らの頬を軽く叩く。パシッ、と音が部屋に響く。頭を振って眠気を飛ばし、ベッドから抜け出す。

寝巻きに着替えずに寝てしまったので着ていた白のワンピースはしわだらけになっていた。棚の中にしまっておいた新たな服を取り出して、ワンピースを脱ぎ、取り出したものに着替える。

そして姿見の前に立って身なりを整える。姿見は元からこの家にあつたもので所々割れてしまっているが十分に機能を果たせていた。服のしわを伸ばし、髪を手櫛で整える。「よし」

部屋の扉を開けると、キイと音が鳴った。昨日の夜は眠気に負けて気付かなかつたが、どうやら蝶番ちょうばんに問題があるらしい。

「朝食が終わったら見てみよう」
扉の開閉音をなくすことよりも主の食事を作ることの方が優先されるのだ。

再び、キイと音を立てて扉を閉めて、廊下を歩き、台所へ。

棚から包丁とまな板を取ってきて、次に野菜を洗う。ための水がほとんど残っていなかった。桶には一割ほどしか水が入っていない。

「今から取りに行かなきゃいけない、よね……」

思わず、答えの返ってくるはずのない質問をしてしまう。

「……………」

もちろん誰かが応えるはずもなく、ハク自身も無言だった。

「仕方ないよね。水がなきゃ朝食が作れないんだし……はあ」

ため息ためいきが零れる。

包丁やまな板、野菜を放置したまま、桶を持って台所を出た。自

身の部屋とは逆方向に廊下を歩み、すぐに玄関に達する。脇においてあるもう一つの桶も手に持って、家から出る。

まだ日はそれほど昇っておらず、少し肌寒いくらいの涼しさが眠気を完全に飛ばす。朝の新鮮な空気は身体から淀みを取り去ってくれているようで心地良かった。

立ち止まって目を閉じて、一度深呼吸をする。あちらこちらから鳥の声が聞こえる……

「いけない。和なごんでいる場合じゃなかった」

歩き出す。家の傍らに作られている、昨日まで蓋の置かれていた井戸を恨めしそうに見ながら、ハクは川へと進む。

普通なら家にある井戸の水を汲くめば良いはずなのだ。だが長い間放置され、かき混ぜられることも新しい水が入ってくることもなかったために井戸の中の水は腐くってしまっていた。近いうち腐った水を捨てなければならぬ。

歩くこと数分、家から川までの道のりのおよそ四分の一を消化したところで、後ろから声が聞こえた。

「……サユ？」

聞き覚えのある声だったが、構わず歩き続けた。

「待つて、サユ」

声は明らかにハクにかけられているものだったが、歩みを止めることはない。ハクは決して”サユ”という人物ではないから。

「サユ、あなた、サユじゃないのかい？」

その言葉に足を止めて振り返る。齡よわい三十代後半ほどと思われる女性性がいた。

「違います」

先程の質問に対し、いつも通りの無表情で簡潔な真実を述べる。

「だってあなたはどうか考えたって」

言葉を遮るように、ハクはスツと腕を上げた。そこにある人間失格の烙印を見せるために。

「えっ……」

女性は一瞬驚愕を露にした後、徐々にその表情が納得に変わっていった。その間中、彼女の視線はずっと白い腕輪に捕らわれていた。「主様の朝食を作らないといけないので私はこれで失礼します」軽く会釈すると女性に背を向けて歩き出した。

「待ちなよ、サユ……じゃなかった。あんた、名前はなんて言うんだい」

ハクは立ち止まって振り返る。

「私はハクと名乗っております」

また振り返って歩き出すと、女性は小走りで駆け寄ってきた。並んで歩く。

「こつちにはいつ帰ってきたんだい？」

ハクはため息を一つ吐く。無視しても話しかけられそうだったので会話を続けることを決めた。

「……昨日です」

「へえ。昨日なのかい。なら、どこに住んで」

「お答えできません」質問を遮り、素早く答える。

「なんで？」

「主様のプライバシーに関することを許可なく口には出来ませんので」

「そうかい……ハクは今、幸せ いや、今の状況に満足しているかい？」

「もちろん満足しています」

即答だった。言葉に力強さはなかったが、決意のようなものを感じさせる響きだった。

「ハク、あんた本当に、満足、しているんだね？」

女性は一句一句区切って発音する。確認を求める言葉の裏に『嘘を吐くな』という本心が存在することは明らかだった。

「もちろんです」

やはり即答。

思考に要した時間はなく、身体に刻まれた通りの答えを伝達する。

表情にはいつも以上に変化がない。心を読み取らせないためのハクの努力はむしろ女性を訝いぶかしませる結果となっていたが。

「そうかい……」

女性のその言葉を最後に無言の時間が続いた。

そもそも、満足しているかという質問自体がおかしいのだ。

満足していないと答えることは、主に文句をつけるということ、それは許されないのである。その上、何が問題なのか問われることになるかも知れない。主に関する事柄は答えられないので、初めからその質問には答えられないことは決まっている。ならばわざわざ満足していないと答える道理はないだろう。

数分の後、女性がゆっくりと話し出した。

「これは昔話、一年と少し前のことなんだけどね。私の家の近所にある家族が住んでいたんだ。今はいなくなっちゃったけどね」

「やめてください」

ハクは女性を睨む。珍しく怒気の籠こもった瞳をしていた。

「なんでだい？」

「その家族の話は、私には関係のないことです」

口ではそう言ったが、実際は聞きたい気持ちと聞きたくない気持ち
ちがハクの中で複雑に混ざり合っていた。

「あんたのために話してるんじゃない。所詮私の自己満足さ」
女性は自嘲気味に言った。そしてハクを見つめる。

「あんたが認められないってんなら、この話は私の独り言ってこと
にしてくれて構わない。ただね、あんたには聞く義務があるんだ」

「……………」

ハクは何も言うことが出来ず、無言で女性の言葉を待った。

そして女性は語り始める。とある事件の顛末てんまつを。

第6話 初対面の再会（後書き）

この小説中での井戸は、雨水をろ過して溜めておく装置のことを指しています。

そのため雨水を取り込む部分に蓋をすると中に新しい水が入ってくることはなくなります。

ちなみに、使う人がなくなった井戸は水が溢れてしまわないように蓋をするのが通例です。

前書きや後書きを使ってつじつま合わせをするようでは、まだまだだと思います。これからも精進するので見捨てないでやって下さい。

それと、土日は模試と部活で忙しくなってしまうので、次話投稿は早くても月曜日になりそうです。

最悪、水曜くらいまでには投稿します。

第7話 とある事件の顛末

「一年と少し前まで、この村 ナギル村にある家族が住んでいた。父と娘二人の三人家族だった。母親は下の娘を産んですぐに亡くなり、娘が小さい頃は大変だったそうだが、重い病気をすることもなく大きくなって、それから家事はほとんど娘がやってしまうので安泰だったそうだ。

けれど事件が起こった。

一年前の深夜、月明かりのない新月の日に、家に人攫さらいの男達が押し入ったのさ。

父親は物音で目が覚めたのか、もともと起きていたのか、娘を護ろうと男達と戦ったらしい。しかし武器を持っている相手に敵うはずもなく、娘達の前で、賊の一人の刃によって斬り倒されちまった。そして抵抗することも出来なかった娘達は捕まって拘束され、攫さらわれた。

その日の夜遅くまで酒を飲んでいた若い男連中がいたんだが、人攫さらい達が撤収していく中でそいつらと鉢合わせしたんだ。そこで揉め事が起こって、近くに住んでいる連中が物音で眠りから覚めて、人攫さらいだつてことに気付いた。それからすぐ村中に連絡が回って、村の男達で人攫さらい達を追ったんだが、帰ってきたのは追っていた男達だけで、娘二人は帰ってこなかった。

男達が人攫さらいを追っている間、私達女は何処の家の子供が攫さらわれたのか調べ回って、攫さらわれたのがサユとミユという娘達だと分かったんだ。家の中は荒らされていて、腹を斬られた父親が倒れとった私が見つけた時には、かろうじて息がある状態だね……」

女性はそこで語るのを一旦止め、鼻を嚙すずった。

「あいつはすごく辛そうな顔をして、『娘は？』って言ったんだ。

私は言ったんだ。今男達が探しているって。心配しなくてもすぐに戻ってくるって。結果的に嘘になっちまったがね。それでもあ

つに希望を持ってほしかった。

けどね、それは間違いだったのかもしれない。あいつ心底安心したような顔してね、『娘を頼む』って言った、んだ……」

女性の声は震えていた。

また、ハクの表情も些か固いものに変わっていた。それは傍から見れば涙を堪えているようにも取れる。

「それがあいつの最期の言葉だった。笑顔のまま眼を閉じて、逝っちゃまった。遺言なんだ。私は、あんた達を頼まれたんだよ……」

「私は」「言つと同時に、今まで堪えていた涙が一滴、ハクの眼から零れ落ちた。」「サユ……じゃ、ない」

唇を噛み締め、桶を握る両手に力を籠めた。

「そう……だったね。あんたはサユ、じゃない」

女性は手で目元に溜まっていた涙を拭った。

「一晩明けた朝、私は家の裏庭にあいつを埋めて墓を作った。墓参り、行ってやってくれないか？ ハク。あんたはサユじゃないかもしれないけど……私の話を聞いて泣いてくれた。それだけで十分だ。たとえサユじゃなくても、あんたが行けばあいつはきっと、報われる」

ハクは俯いていた。俯いたまま、歩いた。女性も何も言わず、ただ横を歩いていった。

やがて川に辿り着いた。

ハクは無言のまま桶を水に浸した。水は桶に当たり、そして流れていく。壁に当たっても、大勢に逆らわず流れていく。留まっていたらきつと、井戸の中の水のように腐ってしまふ。

だから、立ち止まってはいけない。流れを遡ることは出来ない。前に進まない、きつと駄目になってしまう。

「……私はサユじゃない」

「……………」

言葉は誰に対して紡がれたものでもなかった。だから、それが分かったから女性も敢えて何かを言うことはなかった。

「私はサユじゃない」

その言葉は自分に対する暗示。サユなんていう人間はこの世には存在しない。存在しちゃいけない。彼女は一年も前に消えている。

「私はサユじゃない」

別人の過去に囚われてはいけない。ハクという奴隷は目の前のことだけをやっつけていればいい。

「私はサユじゃない。私は、ハク」

過去はとつくに捨てたはずだ。一年前、奴隷になったときにサユの人生は終わっている。

ハクは水に浸っていた桶を引き上げて置くと、背後に立つ女性に振り返った。

「私はハクと申します。これからこの村でお世話になります。ご迷惑を掛けるかもしれませんがよろしくお願いします」

ハクは頭を下げた。

顔を上げたとき、そこにはもう先程までの固い表情も涙もなかった。いつもどおりの無表情だった。

「あの……お名前は何と言うのでしょうか」

「え……？」

女性は明らかに困惑していた。

「……あっ、ああ。名前ね。名前……」

悲しそうな表情に変わっていく。

対してハクの表情には変化がない。

「私はタルムって言っただ。よろしくね、これから」

「はい。よろしくお願いします」ハクは改めて一礼した。

両手に桶を持つ。

「それでは私は主様の朝食の用意がありますので」

そう言っ、女性　タルムとすれ違っても来た道を歩く。

ハクとすれ違つとき、タルムは何か言いたげに口を開いたが、結局は何も言わずに川沿いを歩いていった。途中で一度振り返る。小さくなっていく白い少女の背中を視線で追う。十年以上も面倒を見

てきた少女の背中はいつまで経っても頼りなく見えた。

ハクは、家へ歩く。俯かず、前を向いて。ハクには帰るところがある。主がいる。それは決して過去のことなどではなく、現在のことだ。だから過去こたわに拘とることは出来ない。奴隷だから。

名前を聞いた。

それは拒絶だ。ハクはサユではないから。タルムの名前を知っているはならなかった。タルムが託されたのはサユという少女で、タルムを知っているのはサユだからだ。

サユではない、ハクとして名前を聞いたこと、すなわちそれはハクとして接することを決めたとしたこと。そもそも奴隷である時点で全ては決まっていた。ハクはコクの奴隷で、それ以外の存在証明には価値はない。奴隷、それだけ。ただそれだけ………

家に着く。

出来るだけ庭を　墓があるという裏庭を見ないようにして玄関を開けて中に入る。すぐに台所に行き、料理を始める。

急いで作り終わると、コクの分をお皿に盛り付けて机の上に並べる。

それから部屋に呼びに行こうとして気付く。

「そういえば、私の分って用意しておいた方がいいのかな？」

少し立ち止まって考えてみる。主と食事を共にするのは失礼で、好意に甘えるのも凶じゆう々じゆうしいかもしれない。けれどそのことで主を不機嫌にさせてしまったては本末転倒だ。「よし。用意しよう」と

自分の分も皿に盛り付け、昨日と同じように主と反対側の席に並べて、今度こそコクを呼びに行く。コクがまだ眠っている可能性も考えて、静かに歩く。

部屋の前に辿り着くとノックをした。コンコンと叩くが返事はなかった。

「コク様？」

もう一度、先程より大きめの音で叩き、呼びかける。「コク様、朝食の準備が出来ました」

しかし返事はなかった。

「仕方ないですね。入りますよ、コク様」

本来許可もなく主の部屋に入るというのは褒められた行為ではないが、ハクにとっては朝食を食べてもらうことの方が重要なことだった。

扉を開けて部屋に入ると、ベッドの上には上半身を起こしているコクの姿があった。どこか寂しげな表情で窓の外を眺めている。

「あの、コク様？」

「ハク」

「なんででしょうか？」

ハクの瞳には、その黒い姿が儂く、今にも消えてしまいそうに映った。

コクは振り返って告げた。

「ハク。俺に外の世界を見せてくれないか」

第7話 とある事件の顛末（後書き）

ハクの心理描写で直した方が良い所あったら言って下さい。

麻道はできる限りの努力をしたつもりですがダメだったら直します。

文才も欲しいですが、英語の才能もほしい。

というか努力する才能がほしい。好きなことなら続けられるんですけど……

期末テストの結果に非常にショックを受けてます。

具体的な点数は悲しくなるので書きませんが、麻道の英語の点数は平均点 - 20点です。ちゃんと授業聞いているのに……

愚痴になってしまいましたね。すみません。

英語の勉強しなきゃいけないんですが、やる気が出ないのでとりあえず次話執筆に励んでみます。

………麻道はどんどんダメ人間になっていく気がします。

第8話 禁句（前書き）

麻道暴走のお知らせ。

第8話 禁句

時は少しだけ遡る。さかのぼ

ハクが家に帰ってきて料理を始めたとき、眠りから覚めかけていたコクは台所から聞こえてくる微かな音で目を覚ました。

「ん、う……うう。ふはあ」

欠伸と共に伸びをして、目蓋を上げる。視界には、やはり見慣れぬ灰色の天井が飛び込んでくる。未だ寝ぼけている頭でここが何処なのか考える。

「……ああ、そうだった。俺の家、か」

昨日のやり取りを思い出す……

ハクに振り回されてばかりいた。

回想終了。

「一言で表せて、しかも振り回されてばかりって……なんか格好つかないな」

事実だから仕方のないことだけれど。

それにしてもハクの行動はよく分からない。どうしてそこまで奴隷こたわに拘とるのか、も。

自分が記憶喪失だから分からない。そうやって言い訳する事だつて可能だろう。でもそれは違うと思う。記憶喪失だからといって、コクの一般常識までが消えているのではない、はずだ。食事の方法だって、覚えているし、その他諸々もろもろも忘れたということはない。

ならば記憶を失う前のコクにとってもやはり奴隷は異常なものであったはずだ。奴隷に関することだけを綺麗さっぱり忘れるなんてこと、考えづらい。

ハク自身は奴隷だと主張しているが、コクにとって彼女は単なる

一人の少女なのだ。ハクが言っていたことだが、『奴隷であることを言い訳にしている』ことを認めることなんて出来ない。

だから奴隷がどういうものなのかしつかりと見極める必要がある。そして奴隷を平然と認めている社会についても。

何をすればいいのか？

そんなことは決まってる。奴隷を知らないなら知ればいい。この社会を知らないならば知ればいい。記憶がなくなってしまったなら、ここで作ればいいだけの話だ。

……でも本当にそれでいいんだろうか。

奴隷を知れば、社会を知れば、解決するのだろうか。奴隷を言い訳にするハクをを論破する材料を見つけたところで何の意味があるのだろうか。きっと彼女自身が納得しなければ意味がない。

窓の外を眺める。向こう側には、青い空と白い雲と緑の庭が広がっている。その景色はおそらく、昨日も、一昨日も、その前も、それこそコクが生まれる前から繰り返されてきたものだ。そこには単調だけれども、しつかりと過去がある。しかし、自分はどうなのだろうか。

思い出はここで作ればいい。それは問題ない。けれど失った思い出は、戻ってこない。今まで過ごしてきた時間は失ったままだ。過去を失ったままで、本当にいいんだろうか……

「あの、コク様？」

背後でハクの声が聞こえた。おそらくなかなか起きてこない自分を起こしにきた、といった所だろう。

「ハク」

「なんででしょうか？」

振り返り、言う。「ハク。俺に外の世界を見せてくれないか」

ハクは、しばしの思案の後、「畏まりました。しかしその前に朝食をお召し上がりになってください」

「朝食か。ありがとね、ハク」

「いえ。当たり前のことです」

「じゃあ飯にするか」
言って、ベッドから降りる。

朝食後、ハクは使った食器などを洗いながら、背後に立っているコクに問いかけた。

「コク様、先程仰られていた『外の世界』についてなのですが」
「……………」

ハクは食器を洗いながらコクに話しかけている。振り向かずにも早く適応するなんて思ってもおらず、コクはそのことに呆然として、質問に反応出来なかった。

「コク様？」
ハクが振り返る。

このときになって、やっとコクは驚きから解放された。

「あつ、ごめん。ボーっとしてた」

「いえ。私は構いませんが、大丈夫ですか？」

「本当に大丈夫。大丈夫だから」

「それならいいのですが……………」

「心配しないでもいいよ。…………全く違う話になっちゃうんだけど、そっちのハクの方が、やっぱり俺はいいと思う」

ハクは何のことが分からないと言うように首を傾げ、視線をコクに向けた。その瞳に感情は籠もっていなかったが。

「そちらの『私』とは？」

「えっと、なんて言えばいいのかな。自然体というか、堅苦しくないというかさ。同じ家で寝食を共にするんだから、血は繋がってないかもしれないけど、もう家族なん…だから…さ」

ハクの視線が急に鋭くなっていくのをコクは感じた。顔は無表情で、きつと傍から見ればいつもと変わらないハクだっただろう。

だが確かにその表情はいつもとはまったく違うものだった。見た目はそれほど変わらない。眼が少し細められているくらいだ。しかし纏まとっている雰囲気明らかに違うのだ。感情を映し出さない視線に、まるで鋭利な刃物を首筋に添えられているような気がして

「コク様、どうかありませんでしたか？」

次の瞬間には、もうハクは元通りだった。

「いや、なんでもない」

だからコクもいつも通りに接しようとしたのだが。

「どうしたんですか、コク様。顔が真っ青ですよ？」

「え？ そうか？」

おどけてみたが、コク自身もそれは分かっていた。背中には冷や汗が伝っている。

「そうですよ。真っ青です。……………もしかして食事がお口に合わなかったのですか？」

「い、いや、そんなことはない、が……………」

ハクが申し訳なさそうに視線を逸らし、合わせ、また逸らす。

「……………申し訳ありません」

俯いて小さく呟いた。

「違う……………謝るのは俺だ。ごめん。それと、外に行くって話はやっぱり明日にしてもらってもいいか」

「……………はい」

それから双方無言で、ハクが食器を洗う音だけが聞こえていた。そんな空間が居たたまれなくなって、コクは静かにその場を立ち去った。

早足で廊下を歩いて自室の前に辿り着くと、扉を乱暴に開けて部屋の中に入り、静かに閉めた。それと同時に、緊張の糸が解けたことよって腰が抜け、扉に背中を預けた。そのままずると滑り落

ちていき、床に腰を下ろした。

「は、はははっ、ははっ、くくくっ」

場違いな笑いが漏れた。身体は脱力して動いてくれないのに、口元だけは引き攣^つっていた。

そして意味はないと思いつつも、この部屋に近づいてくる足音がないかどうか、耳を澄ました。遠くから水音が聞こえてくるだけだった。ハクはまだ洗い物を続けている。そのことが分かり、

コクは心底安堵した。

ハクはそんなことをするはずがないと思いつつも、本能が警鐘を鳴らしていたのだ。『あいつは危険だ』と。『殺される』と。

殺気を含んだ視線、なんて表現じゃあ、甘い。そんな生易しいものじゃなかった。コクは動けなかったのだ。本能が逃げると身体に命令していたにもかかわらず、全く動けなかった。

きっかけはほんの少しの警戒心だったのかも知れない。

ハクの顔には表情がない。視線には感情が籠もっていない。それは例えるなら純粹な水のように。だがそれゆえに、少しでも異物が混入すれば速やかに広がって、支配する。

真相は本人しか分からない。いや、もしかすると本人すら分からないだろう。それほど微妙な差異。研ぎ澄まされた針のような殺気だった。

あんな殺気を一朝一夕で習得できるとは思わない。しかも無意識のうちになんかをやったのける異常さ。

ハクはいつたい何者なのだろうか？

考えても分かることではない。

しかし確かなことが一つだけある。ハクは『家族』という言葉に反応した。口では昔の自分と今の自分とは全くの別人だと言っているが、過去の自分を簡単に捨てられている訳がない。やはり未だ未練があるはずだ。だから『家族』という言葉に反応して、本物の家族を思い浮かべてしまったのだろう。

情報の整理が終わった所で、ドッと精神的な疲れが押し寄せてき

た。その流れに逆らい続けることができずに、コクは意識を手放した。

第8話 禁句（後書き）

すみません、暴走しました。

もともとはこんな話（後半）を入れる予定はなかったんですが……書いてしまったものは仕方がないです。

ハクの素性に関する伏線（って言っていていいのかな？）は後々ちゃんと回収します。

気長に待っていてください。

それと、麻道は夏休みに入ると忙しくなりそうなので投稿するペースが落ちるかも知れません。

ま、今でも遅いんですが、遅い上に不定期になる可能性があります。

今週の三連休は朝から晩まで部活に拘束されることになりそうなので、次話は日月火のいずれかくらいになります。

第9話 2つの傷

コクが部屋を出て行く足音が聞こえた。

「やっちゃった」

ハクは自嘲的に笑って呟く。

足音はどんどん小さくなり、やがてハクが食器を洗う音に掻き消される。

原因は分かりきっている。私が無闇に気を張っていたせいだ。

サユと呼ばれた少女の父親の、死ぬ間際の話なんて聞くべきではなかった。無関係の他人になっていくはずなのに、それでも彼女の父親の話聞いて心が揺れてしまっている。

今の時代、人攫いが特別珍しいということはない。むしろ滅多に人攫いなど経験していなかった、ここ、ナギル村が珍しい場所だったのだ。

何処にでもあるような話だ。少女が二人攫われて、その父親が殺された、たったそれだけの話。

話を聞いて、心を痛めるのはいい。可哀想だと同情するのもいい。でも、つらいと思ってしまうことは赦ゆるされない。涙を流してはいけないのだ。

だって、ハクと呼ばれる奴隷はサユという名の少女とは全くの別人なのだ。悲劇を悲しんでもいいし、サユに同情するのだって構わない。けれど自分をサユという少女に重ねて、つらいと思うのは違う。

話を聞いて泣いていた時、あの時の私は『ハク』ではなかった。

『サユ』になってしまった。間違えていた。

間違いを犯してしまった時にしなければならぬことは何か。

謝罪をしなければならぬし、反省もそうだ。だが、最も重要なことはそんなことではない。対策を立ててもう二度と同じ過ちを繰り返さないこと。それこそが最優先してやるべきことであり、人間

の繁栄の理由でもあると思う。

もちろん私は人間ではないが、人間と同じ身体構造をしている奴隷にも行うことはできる。ならば努力をしなければならぬ。

家への帰り道でそんなことを考えていた。

もう二度と『サユ』にならないために、サユの家族に関することには触れない。そう決めた。

決めてしまったから、サユの父親の墓参りなんてするなと自分に言い聞かせた。

気にしないように、気にしないようにと勤めていた。

でもそれが裏目に出てしまった。

コクの口から出た『家族』という言葉。コクがハクの心境を知るはずもない。きつといい意味で言ったのだろう。

普段のハクならば両手を挙げて喜ぶような真似はしないまでも、顔が自然とほころぶくらいの嬉しさはあつたかもしれない。

しかしサユの家族のことを気にしないように気を張っていたハクにとっては自身の決意を揺るがす言葉でしかなかった。

それゆえコクを睨んでしまった。

『家族』を忘れようとしているのに、どうして思い出させるの？ 心の中でそうやって問いかけている自分がいた。

気付いたときには遅かった。コクは顔面蒼白になっていた。

コク様に「ありがとうございます」と言えば何も問題はなかったはずなのに、どうしてこんなことをしてしまったのだろう。そんな思いが渦巻いていたし、今になっても悩んでいるままで……………

「痛っ」

洗っていた包丁の刃で人差し指の先を切ってしまった。傷は浅いけれどうっすらと血が滲にじんできている。考え事をしていて注意力が散漫になっていたようだ。

「はあ……………手当てしなきゃ」

包丁を置いて手を綺麗な水で洗い流し、自室に行く。

部屋に入ると、切っていない方の手で棚を開けて、「えーと、確

かこの辺りに……ん、あつた」救急箱を取り出す。箱を机の上に広げて消毒液を用意して、指先にかける。

消毒液が滲みたのかハクは一瞬、顔をしかめた。

次に絆創膏を探し出して、指に巻く。人差し指を曲げたり伸ばしたりしてみるが、第一関節に絆創膏がかかっているようにも動かしにくい。

「しょうがない、かな」

広げた救急箱を片付けて、棚に入れ直す。

部屋を出て台所に戻ると、ハクはまた洗い物を再開した。

昼。

食事の準備を終えたハクはコクを呼ぶために彼の自室の前に立って、悩んでいた。

理由は単純だが、非常に難しい問題でもある。それはコクを睨んだ、つまりコクに敵意を向けてしまったハクに”価値”があるのかという問題だ。

待遇が悪くなるのはおそらく避けられないことであるだろう。先程も自分の分の食事を用意するべきかどうかを散々迷っていたが、一緒に食事をする許可など降りほしないうと考えると、結局は一人分しか用意しなかった。

そもそも、もっと根本的な問題すらある。コク様が私と生活をしたくないと言うのなら、私はこの家の中で寝泊りすることは出来ないし、最悪命すら危うい。コク様が、生きる価値なしと判断すれば私は死ななければならぬ。……死ぬ覚悟は出来ている。

もしもの時は、サユの父親の墓参りをする猶予を貰うつもりだ。コク様の奴隷である限り墓参りをするつもりはなかったが、死ぬ前に一度くらいはおこうとも思っている。

目を閉じて心を落ち着かせて、もう一度覚悟を決める。脳裏には

何故か、コクと初めて出会った怪しげな祭壇のような場所が浮かんだ。

「よし」

意を決してノブを握り、扉を引き開ける。

ばたつ、と足元にコクが仰向けに倒れてきた。

「え？ あっ……………」

驚きで思考が停止する。

コクは倒れた衝撃で目覚めたのか、目を細く開けて瞬きを数度繰り返した。その瞳がハクを捉える。

「あ、あ……………」

口をパクパクさせていたハクはそれで正気を取り戻した。「あ、

あの……………」

コクは打った箇所をさすりながら上半身を起こした。

「ハク……………おはよう」

眠たげな眼でハクを見つめて言った。

「もうお昼ですよ。コク様」

無表情を装って訂正する。

「……………」

コクの瞳が緩やかに理解の色を映し出していく。今朝のハクとのやり取りを思い出したのだろう。

双方が黙って相手を見つめていた。やがてコクは視線を逸らして俯いた。罵倒の言葉すらない。それは 拒絶だ。

予想していたことなのに、実際に目の前で事実を確認したハクは無性に悲しくなった。

どうしてだろう？ 眼の奥が熱い。

「……………申し訳ありませんでした」

声は自然と重く低くなる。頭を深々と下げた。

それでもコクは黙ったまま。ハクの視界には床と自分の脚だけがあり、コクの表情はうかがい知れない。気になるが、目を背けたい気持ちが強くて顔を上げることはできずにいる。

風が二人の間を吹き抜けていった。何か大切なものを吹き攫われてしまったような気がして、また眼の奥が熱くなる。絆なんてものはなかったけれど、主従関係以上のものが確かにあったはずで、それが壊れてしまった。コクの気持ちは分からないが、少なくともハクはそう感じていた。

風に吹かれた扉がキィと音を立てて閉まり、途中でハクの頭にぶつかった。ごん、と鳴る。

痛みによって、湛^{たた}えていた涙が一粒、ハクの頬を伝って床に落ちた。その痛みは身体のものなのか、心のものなのか、ハク自身^{わか}判らずにいる。

今のハクの姿は傍から見れば滑稽に見えただろうが、それを嗤^{わひ}う者はここにはいない。

無言の時間が流れる。やがて、

「なあ、ハク」

「……………」

無言で続きを待った。

「……………ごめんな……………ごめん」

「……………え？」

言われた意味が理解出来ない。

顔を上げてみると、遠慮がちにハクを見つめる視線があった。

「ごめんな、ハク」

また謝罪の言葉。聞き違いなどではない。

「……………」

口からはそんな言葉が自然と漏れていた。

「……………どうして私に謝るの？」

敬語を使うことも忘れ、ただ聞いた。

「……………どうして……………か」

コクは苦笑した。

「さあ？ 俺にもよく分からない。だけど俺がそうしたいと思ったから謝ったんだと思う。……………俺は多分悪いことはやってない。でも

さ、それでも俺は謝りたかった。ハクを傷つけたなら俺は謝らなきゃならない。そう思ったんだ」

「……………どうして？ 私は奴隷なのに……………」

ハクは俯き、自身の腕に付けられている白い腕輪を撫でた。顔を上げる。

「私は！！ 奴隷なんだよ！？」

強く捲くし立てる。

「私はコクの奴隷なのに！ ねえ、どうして！？ 絶対嫌われたって思った。拒絶されるって……………だから！」

ハクの眼から涙の粒が散り、キラリと光った。

「私は死ぬ覚悟だった。……………なのに、どうして……………」

コクが許してくれた、それどころか自分が悪いと言い出して謝った。そのことを喜んでる私も、確かにいる。けれど認めることが出来ない私だっているのだ。

ハクが捲くし立てている間、ずっとコクは優しい視線を送っていた。それは例えるなら、我が儘をこねる妹を見るような視線だ。

「俺はハクを嫌ったりなんかしないし、拒絶したいとも思わない。死んでもらいたいなんて論外だ。……………なあ、ハク。俺はお前に笑っていてほしいんだ」

「……………」

そうしてハクは悟った。まだ何も壊れてなんていなかった。

傷は付いてしまったかも知れない。けれど傷ならば簡単に治すことができる。難しい問題なんて存在しなかったのだ。そこには単純で簡単な問題しかなかった。二人の関係に出来た傷は、ハクの人差し指の切り傷のように浅かったのだ。

感じていた不安は、莫大な安堵に塗りつぶされて消えた。頬が緩む。

目元に溜まっていた涙を拭って、言う。

「コク様、お食事の用意が来ております」

コクは苦笑しながら返した。「じゃあ飯にするか」

「はい！」

傷が治ったかどうか、そんなことはハクには分からない。けれど痛みがなくなっていたのは事実だった。

第9話 2つの傷（後書き）

今回の話はハクの一人称の描写を多用してしまったので、コクの感情描写をしないようにしてみました。かえって分かりにくくなってしまう気がします。

あと、急展開すぎたかも知れません。

「そう思うなら直せよ！」って話なんですが、現在の麻道の能力ではこれ以上の引き伸ばしは難しいです。
すみません。

次話投稿についてなんです。正直なところいつになるのかわかりません。

21日～23日は部活の合宿があつて書く暇がありません。

一応、PCを使うことができる環境にはあるんですが、朝7時から深夜3～4時までは食事と風呂の時間を除いて、ずっと作業をすることになると思つので、小説を書く時間がないんですよ。3、4時間しかない貴重な睡眠時間を削つて小説を書くほど麻道はタフじゃないです。

23日夜～24日夕方にかけては足りない睡眠時間を補うために爆睡すると思います。

25日は一日宿題に追われていると思います。

いや、26～31日は学校の夏季特別授業があつて、26日が提出期限の宿題が大量にあるですよ。しかもこの期間に、英語・数学・古文・漢文のテストがあるという始末。無論、テスト勉強に追われるわけです。もちろんこの期間も部活に拘束されず。

したがって、時間がないです。暇を見つけては少しずつ書いていく

予定ですが、次話投稿は8月に入ってからになるかも知れません。

第10話 準備中に(前書き)

お待たせしました。

第10話、祝2桁突入！

って、こんなことで喜んでいる麻道もどうかと思うんですが。
話のほうは全く進んでいないわけだし……。

とりあえず、どうぞ。

(ちなみに調子にのってR15の表現入れてます……)

第10話 準備中に

翌朝。

昨日と同じような時間に眼を覚ましたコクは早々に寝巻きを着替えて、食卓に向かった。

台所を見ると、ハクが朝食の準備を始めている。

足音で気付いたのか、ハクは首だけ振り返った。

「おはようございます、コク様」

ハクは、注意しなければ分からないほどの微笑を湛^たえている。

「ん。おはよう、ハク」

返事をし、椅子に座って考える。

会ってすぐの頃は無表情を貫き通している少女に見えたものの、今は微小なものだが確かに表情の変化を見つけることが出来る。これはコクがハクの表情の変化に敏感になり分かるようになったからなのか、ハクが感情を表情に出すようになってくれたからなのか。出来れば後者であってほしいな、とコクは願う。

少しずつでもいいからハクが心を開いてくれればいい。

そういう点では昨日の出来事も捨てたものではない。

お互いに気持ちのすれ違いが起こってしまったし、ハクはそれが原因で涙まで零^{こぼ}した。しかしあの時、敬語を使うことも忘れてコクに詰問していたハクは本音を吐露出来ていた。

そんなハク対して、コクも正直な気持ちを伝えることが出来た。

……今思えば相当恥ずかしいことを口走った気がしないでもないが、発端はどうあれ、いい結果が導いたのだから良かったのだろう。

ただ、あの子の後の昼食で食事を一人分しか用意していなかったことをコクが怒ったのだが、その説教を微妙に嬉しそうな顔で聞いているのにはさすがに戸惑いを隠せなかった。それも”良い”方向に転がった結果なのだと思います。

「ぐるぐる」腹の虫が鳴いた。

「あと少しお待ちください。もうすぐ出来ます」とクスクス笑いながらハクが言う。

「いや、別に急ぐ必要はないぞ」

何故か自分が駄々をこねているように感じられて恥ずかしくなる。

「いえ。身体というものは正直ですから」

「それはそうだが……」

「特に三大欲求については。……コク様」

ハクが振り返り、わりと真剣にコクを見た。

「な、なんだ……？」

急な態度の変化に狼狽する。

「必要とあらばいつでも仰ってください。睡眠欲については私がお

手伝いする必要もないと思います……」

「ちょ、ちょっといいかな？ ハクさん」

「なんででしょうか？」

「キミは朝からどういった方向に話題を持っていくこうとしているのかな？ 三大欲求とか、手伝いとか」

「……コク様の質問の意図がよく分かりません。私は三大欲求の中の食欲についてお手伝いする、つまり朝昼晩に限らずお腹が空いたのならいつでも仰ってください、という意味で申し上げたのですが、そこでハクは、にやりと意地の悪い笑みを浮かべる。

「もしかしてコク様はもう一つの”欲”を思い浮かべられたのですか？ それとも……ソツチ方面の”食”欲……？」

「……………」

「あの、コク様……」

「はあ」

ため息を吐く。二日前にも同じようなやり取りをした気がする。

「さつさと飯をくれ……」

ハクがあまりにも惚けた態度をとっているので反論する気力は起こらなかった。

「畏まりました」ハクは微笑して頷く。

「こういう所で唐突にそういうネタを振ってくるのはある意味での牽制けんせいなのではないか、としみじみ感じるコクであった。」

「片付けが済みましたら出かけますので準備をしておいてください」
朝食後、ハクにそう言われたのでとりあえず自室まで戻ってきたコクだったが……
「準備って何すればいいんだ？」

「……………」
もちろん疑問に答える者はいない。 答える者がいた場合、それはそれで問題だろうが。

結局、身支度を整えるだけで他にすることもなく、ベッドに腰掛けてしばらくハクを待っていた。

「こんこん、とノックの音がした。」

「コク様」続いて扉の奥からハクの声。

「今、行くよ」

返事をしてベッドから立つと、扉まで歩いて開ける こん、と扉が何かにぶつかった。

「うづうづ」

目の前には頭を抑えて痛がっているハクがいた。 というかそんなことよりも気になることがあるのだが……

「コク様あ。私が開けようとしていたのに、なんで開けるんですかあ」

ハクは微妙に涙目になりながら、間延びした抗議の声を上げる。

「ごめん、ごめん」素直に謝る。

「まあ、いいですけど」

無表情に戻るハク。拗すねた表情を期待したコクだったが、さすがにそれは高望みだったらしい。

「ところでさ、ハク。お前その服装はどうしたんだ？」

「服がどうかしましたか？」首を傾げる。

「どうかって……明らかに変じゃないか？ それ」

今のハクの服装はおかしいのだ。地面につきそうになるほど丈の長い黒いコートを羽織っていて、フードを被^{かぶ}っている。手にはバッグを持っているのだが、袖も長く非常に持ちにくそうだ。

そもそも、今の気温でそのような格好をしては暑いのではないだろうか？

「……平気です」

先程の質問に、しばらく間を空けてからハクが答える。

「平気かどうかは聞いていないんだが。それより、辛い^{つらい}なら着る必要はないだろ」

「いえ、平気です」

「いや、だつてさ」

「へ・い・き・で・す」

ハクが折れてくれそうにないので質問の方向を変える。

「なあ、ハクはなんでそんな格好をしてるんだ？」

「……この村には奴隷はあまりいませんから、私が外に出ると目立ってしまいます」

「目立ったって構わないだろ？」

「それは……その……」

「と云うかさ。奴隷だつて分からないようにするためなら腕輪隠しさえすれば良いんじゃないの？ 長袖着るだけで十分だろ」

「そうですね……そうなんです……」

「何か問題でもあるのか？」

「い、いえ。ありません」

「ならさつさと着替えて来い」

「……分かりました」

ハクはしぶしぶ頷くと、小走りで自室へ駆けていった。

数分後、廊下の壁にもたれて待っていると、キィという音を鳴らしてハクの部屋の扉が開いた。

「コク様、これでよろしいでしょうか」

ハクの格好を上から下へ眺める。

まずは黒いフード……フード？

「なあ、さつきもそうだったが何故フードを被る必要がある？」

「……………」ハクは答えない。

「……………」妥協するか

フードから下に眼を落とすと、感情をうかがわせずにこちら見つめる視線があり、さらに下げると薄手の黒い長袖。そしてこげ茶色の短パン。そこからスラリと伸びる細くて白い脚……………

「コク様……………」どこをご覧になっているのですか」

ハクの声で我に返る。

「い、いや、なんでもない、なんでもないよ」

慌てて弁解するが、その慌てぶりが”やましいことをしていた自覚がある”と物語っているので本末転倒である。

ハクはジトツとした視線を送った後、ため息を吐く。

「コク様が狼さんである以上、年頃の女性の身体に興味を抱くのは当然のことではありますが…………私に悟られないように見るなど、工夫してはいかがですか」

「工夫って…………。そ、そもそも！俺は別に意識して見てた訳じゃない。偶々…………たまたま そう！偶々眼がそっちに行っただけなんだよ」

「つまりコク様は無意識のうちに女性の脚を眼で追っているのですか。末期ですね、それは」

「ち、違う。俺はそんなんじゃない」

「女性に興味はないと？」

「…………あ、ああ。興味ない」

「そうでしたか。まさかコク様が男色に染まっていたとは…………知りませんでした」

「ちよっと待て。どうしてそういう展開になる！？」

「ですから、コク様は女性に興味は
「訂正、訂正。やっぱり訂正する。俺はハクには興味なし。これでいいか？」

ハクは、ふっと悲しそうに笑った。

「そうですね、コク様は私に興味はない、と仰るのですか」

そして目元を指でこすり、何故か踵かかとを返して部屋に戻ろうとする。
「待て待て、どうしてそこで悲しそうにする!？」

言って、ハクの腕を掴む。いつかのようなへまをしないように加える力は最小限にして。

「コク様仰いましたよね。『年頃の男女が一つ屋根の下で暮らすのは問題があるのではないか』と」

「確かに言ったが」

「そんな、いつイベントが起こってもおかしくないような状況で二日も生活していたんですよ。それなのにコク様は私に興味がないと仰った。……私にはそんなに魅力がないのですか？」

”イベント”という言葉に突っ込みたい気持ちもあったが、ハクの真剣な眼差しを受け、止まる。

「あ、え……えっと……ごめん。ハクに興味ないって言ったのは嘘だよ」

申し訳ないと思ったコクはハクと眼を合わせていることができず、少しだけ視線を下げて謝った。

ハクの口元がにやりとつり上がるが、俯いているコクはそれに気付かない。

「そうですね、コク様は私に興味がある狼さんだと認めるのですね」

「ああ……ごめんな、ハク……。……。って、狼じゃないぞ、俺は!？」

勢いよく顔を上げたコクは今になって、ハクの表情の変化に気付く。内心で『はめられた!』と愚痴る。

「しかし先程ご自身で認められましたよね？」

「いや、あれは勢いで言ったただけであって」

「つまり私には興味がないと？」

ハクはまた悲しそうな顔をする。

「いやいや、そういう訳じゃなく……。って、はあ」

今になってやっと自分がいいように弄ばれてもてあそんでいるだけだと理解して、ため息が出る。

ハクもコクのため息の理由が分かったようで無表情に戻った。

「んじゃあ、出かけるか。ハク」

「畏まりました」

本当に僅わずかに微笑しているハクを見て、「ハクの表情が急激に変化したときは気をつけなければならぬ」とコクは思った。

第10話 準備中に（後書き）

今回はシリアス成分少な目の話になりました。

というかコメディに話の内容を傾けようとするR15の話になってしまう自分が悲しいです。

次話はそう時間も掛からずに投稿できると思います。

実はプチスランプ中だったり。…………早いと思いますよ、自分でも
まあ、それなりに頑張ります。

第11話 道を歩いて

家を出ると、そこにはのどかな風景が広がっていた。目の前には草むらが広がり、その奥には未開発の森林が茂っている。

その光景に圧倒されて立ち止まっていると、後ろからハクの声がした。

「コク様、こちらです」

見ると、フード付きの黒の長袖を纏まとった少女は、西 現在の太陽の位置から推測して へ続く舗装されていない道の先を指している。

「ああ、分かった」

肌寒い季節でもないのにフードを目深に被かぶったハクの姿にはやはり違和感があるが、言っても無駄なので気に留めないようにする。

指された道へ歩き出すと、ハクはコクの斜め後ろの位置を保つについて来た。

「ハク……案内はお前がしてくれるんじゃないの？」

「はい。そうですが、何か？」

「ならば、なんで俺より後ろ歩いてんの？ 案内になってないじゃん」

ハクはため息混じりに言う。

「私は奴隷ですよ」

「いやいや、それ理由になってないだろ」

返事も自然とため息混じりになってしまふ。お互い、家を出るまでのやり取りで強く言い合いをする気力が無いのだろう。

「通常、奴隷は主の前を歩かないものです」

「今は通常時ではありません。なのでせめて俺と並んで歩いてくれ。以上、結論」

コクは脱力感が漂ただよう声で控えめな命令をする。

「……分かりました」

ハクは小走りになってコクの横に並ぶと、またスピードを歩きに戻す。

「小言みたいになって悪いんだけどさ。やっぱり体裁よりも効率重視ね。……これは前も言ったか」

「はい。効率を優先しろ、とは仰られていたはずですよ」

「んじゃあ、そういうことで。いいか？」

「……………」

「返事は？」

「……………これは非常に難しい問題なので返事は保留とさせていただきます」

「はあ。まあどうでもいいんだけど。……いや、よくないか……………」

コクは独りごちたが、ハクがそれを気にすることは無い。

「コク様こそ、家の中では効率優先で構いませんが、外ではしつかりと体裁を気にしてくださいよ」

「最低限は気にするよ。それ以上は期待するな」

「そうですか……………私が奴隷だとバレていない間は私がなんとかしますが、奴隷だとバレた場合は私の主らしい態度を取ってくださいよ」

「へーい」

この人は絶対に分かっていない、と呆れた視線をハクが送ったが、コクはちらりと見ただけでこれといって大きな反応はしなかった。

しばらく無言で歩いていくと、周りにはだんだんと民家や畑が増えていき、既に木の姿は遠くなっている。どうやら村の中心部に向かっていているらしい。

「そういうえば、俺、今どこに向かっているのか全く知らないんだけど」

「申し上げていませんから、当然ですね」

「いや、当然とか言っていないで教えてくれよ」

「今は市へ向かっています」

「市？」

「はい、市です。大体平均で一ヶ月に四、五回、”中央”から商人の人達がやってきて開いてくれるんですよ。今日はちょうどその日だったので買い物も兼ねて行くことにしましたが、問題あるでしょうか」

「いや、ない。むしろ俺も市ってヤツを見てみたいからな。歓迎だ」「そうですね」

ハクはそっけなく返す。「問題があるか」と訊いておいて、返事に対する興味が然程感じられないハクの態度に苦笑が漏れる。

「そういえば、さつきハクが”中央”って言ってたけど、それってこの国の首都のことなのか？」

「シウト？ なんですかそれは」

ハクは不思議そうに首を傾げる。

「えっ、知らない？ 首都って」

「はい。存じ上げておりません」

コクはしばしの間、顎に手を置いて、首都をどう説明すべきか思案する。

「えーっとな、首都って言うのは……まあ、国の中央みたいなもんだ」

結局、詳しく説明することを諦めて微妙な説明になってしまった。

首都とはその国の中央政府がある都市のことを指す言葉なのだが、生憎コクはそこまで詳しい定義を知らなかった。

「そうですね。コク様の説明が正しいならば、シウトではありませんね。そもそもこの地域は国ではありませんし」

「は？ 嘘だろ」

「いいえ、本当です。北方には国があると聞いたことがあります。この辺りでは町や村による自治が行われる場合がほとんどです。もちろんこの村もそうですね」

「……へえ、そうなの」

コクは国がない状態というものを想像して人々が争っている光景

を思い浮かべてしまい、苦い顔をした。しかし、「そんなはずはないだろう」とすぐに気を取り直して別の質問に移る。

「それじゃあさつきハクが言ってた”中央”ってのは？」

「それは商業や流通の”中央”という意味ですね。ここから馬車で二日ほどの所にある、商業の栄えた大きな町のことです。この辺りの商人はほとんどがそこを中心に活動していますね。町の名前が、早口言葉のように長くて発音しにくかったから、もともとは商人の人達の間だけで使われていた”中央”という言葉が広がったそうです。町の名前を聞いたことはありませんが……よく覚えていません」

「そんないい加減でいいのか……」

「問題がなかったからそうなっているのでしょう」

「いや、そうなんだろうけどさ」

後味が悪いような気持ちになったコクだったが、そのことを議論するほどこの地域に詳しくもないし、議論することは体力を浪費するだけで無益なことこの上ない。そのため気にせずに流すことにした。

会話が途切れて、足音と遠くから聞こえる喧騒だけが場を支配する。

これとって話すこともないコクは思考の海に沈む。

国が存在しない。

その事実のコクに決して少なくはない衝撃を与えていた。

コクは自身が育った地域　おそらくここから相当な距離が離れている文化圏の異なる場所　のことは覚えていないが、国というものは当たり前のように存在しているものだったはずだ。現に今、コクが国がないことに衝撃を受けているのがよい証拠である。

北方にはあるらしいが重要なのは身の回りの、つまり住んでいる地域のことである。

国が存在しないこと、それ自体にはそれほど感慨がある訳ではない。

例えば、この地域に国ができたからといってそれがどのような影

響を与え、利益になるのか。少なくともコクは答えることが出来ない。国がないことについてとやかく言う資格はないのだ。

それに本当に必要なものは意図的に作らなくても自然に生まれるものだ。ここは国を作る必要のない文化を持っているのだろう。もちろんその具体的な内容を推測することは出来ないが。

閑話休題。

コクが気になっているのは国の有無ではなく、国がないにも関わらず奴隷という制度が確立されているという点である。

国が奴隷という身分を厳格に定めているのなら分かるが、ここではそのようなことはない。すなわち奴隷制度が風習のようなものになっているということだ。

しかも、奴隷は白い腕輪をはめ、その主は黒い腕輪をはめる、こんな具体的な決まり^{ルル}まである。この村にはあまり奴隷がいないうハクの話^{ルル}を聞く限り、腕輪の決まり^{ルル}は自治が行われているこの村だけのものではなく、この辺りの地域一帯でのものなのだろう。

「はあ」

ため息が出る。

自分はどうしてこんな小難しい考察をしているのだろう。

奴隷制度が国の定めたものであるうと風習であるうと関係ないではないか。歴史を学びたい訳ではない。”奴隷制度というものがある”という認識だけで十分だ。

何がしたいのか、それを見失ってはならない。

奴隷であることを理由に感情を抑え込まないでほしい　ハク
に望んでいることだ。

奴隷の制度を変えようとしているのではない。たった一人の少女の気持ちを動かすのに複雑な考察は無意味だ。

やらねばならないこと。それは。

「ハク」

「はい。なんででしょうか」

ハクは無表情にコクを見た。

ハクが心を開けるような相手になること。そして

「この村について教えてくれないか」

自分ひとりで、この場所で生きていけるようになることだ。ハクに頼ってばかりではいられない。だが今はまだ、自分の知らないことが多すぎる。

「ナギルについて、ですか？」

「ここ、ナギル村って言うのか？」

「そうですが。どうしたのですか、唐突に」

「いや、俺もここで生活することになったんだし、そりゃあ知ってる方が便利だろ」

「はあ、そうですね」

「んじゃあ、頼むわ」

「畏まりました。えっと、まずは……………」

一通り説明を受けた後、コクは村の地理、風習や行事等、必要になると思われる事柄について、ハクに細かく訊いていった。問答は市の開催場所に着くまで続けられることになるだろう。

どうしてハクがナギル村についてそこまで詳しいのか。そのことをコクが疑問に思うことはなく、また理由を知るのも今はまだ先の話である。

第11話 道を歩いて（後書き）

説明っぽい回になってしまいました。

今回新しく追加した設定が物語の中で重要なファクターになっていくことはたぶんありません。

早めに投稿できるとか言っておいて2日も経ってしまいました。すみません。

言い訳になるんですが、サボってたってわけじゃないんです。別の小説を書き置いて……。

むしろサボってるのは勉強のほうだったりするわけで。

いい加減に夏休みの宿題を始めなければ、と思う今日この頃。

次話は早くも木曜、遅くとも土曜までには投稿したいと思います。

第12話 繋いだ手（前書き）

ありがちな結果な上に、過去最短だったり。

第12話 繋いだ手

市が開催されている通りに着くと、そこは活気と人が満ち溢れた場所だった。コク達の家の周りが閑静なことを考えると、とても同じ村の中だとは思えない。

雰囲気に圧倒されて知らず知らずのうちに立ち止まっていた。

「すごい……」

感嘆の言葉が意図せず口から漏れる。

まだ距離があるのだが、自慢の品を宣伝する商人達の声はここまですぐ聞こえてくる。

コクは眼前に広がる光景に呆然としながらも言葉を発する。

「ハク、ここっていつもこんな感じなのか」

「はい。市が開催される時はいつもこのくらいの賑わいですね。しかし開催されていない時でも、ここまで活気はありませんがそれでも人は多いですよ。市とは関係なく開いている店もたくさんありますから」

「へえ、そうなのか。同じ村のなかでも店があるなしでは人の出入りが違ってくるんだな。俺達の家の近くとは大違いだ」

そう言って、コクは笑った。

だが、ハクの耳に響いたのは笑い声ではなく、コクが無意識に呟いたであろう”俺達の家”という言葉。

訂正しなければならぬと思つてコクに視線を向けたハクだったが、そこに浮かんでいる笑顔を見て思い留まった。無闇にコクを不機嫌にする必要はないのだ。

結局はコクを肯定する返事をすることにした。

「そうですね。やはり人は物がお金で買えるという利便性に惹かれるのでしょうか。それに、家のある場所はこの村の中ではどちらかと言えば農業地帯に属していますので、もともと住んでいる人口も少ないんです」

「ああ、確かに。あそこはやっぱり感じからして農業だろうな」

コクが納得して一人で頷いているとハクが遠慮がちに声をかける。

「コク様、そろそろよろしいでしょうか」

「そうだな。いつまでも突っ立ってちゃ、来た意味がないからな」

コク達はなにも見学に来た訳ではない。こんなところで立ち止まっているままでは買い物をするという目標が達成できず本末転倒なのだ。

そうして歩き出そうとしたコクだったが、一歩目を踏み出したところでハクに手を掴まれて止まる。

「なに？」

振り返って尋ねる。

ハクは顔を背けて言った。

「あの……手を繋いでいただけじゃないでしょうか」

「え？」

ハクの表情は黒いフードが覆い隠していてよく見えない。ありえないと分かっているが、フードの奥で頬を染めているハクの顔を想像してしまった。

「いや、いいんだけどさ」

頬を染めながらも、おずおずと手を差し出した。

ハクは顔を俯かせてコクの手を確認すると、すうっと手を差し出して、握った。

「あ、ありがとうございます。失礼かも知れませんが、私がこうさせていたできたかったです……」

ハクは背けていた顔をコクに向けた。そこに浮かんでいたのは恥ずかしかっている表情ではなく、いつも通りの無表情だった。

「この人ごみの中では逸はくれてしまう可能性がありますので」

「……あつ、ああ。そういうことね。はははっ」

乾いた笑い声で誤魔化し、言葉で納得したことを表現してみるが勘違いしてしまった恥ずかしさは消えない。耳が熱くなっているのを感じる。

ハクはコクを見上げて言った。

「コク様？ どうされたのですか。耳が真っ赤ですよ」

「い、いや。なんでもない。なんでもないよ」

「もしかしてコク様」

ハクがにやりと笑みを浮かべた。

「勘違いなさったのですか？」

その顔を見て、コクは自分が騙されたことを理解した。

「……はあ。俺ははめられたのか」

「えっ、コク様？ そこは焦って否定するところではないのですか？」

「だってお前さ。普段は無表情なのに、俺をはめたときはいつつも”してやったり”って顔してるんだもん。そりゃ慣れれば分かるよ」「うっつ。それではこれからは出来るだけ気持ちを顔に出さないように精進いたします」

「……精進する方向が間違ってるから。表情云々の前にやらなきやいいだろうに」

コクは肩を竦めてため息を吐いた。

「それにさ、お前には無理に飾らずにお前らしくしてほしいんだよ」

コクが若干疲れが漂う微笑みを浮かべながら告げると、ハクは

ジトツとした視線を返した。

「コク様はそんなに私を落としたいのですか？」

「は？ なんでそんな展開になるんだ？」

「……無意識のうちにやっていたんですか。昨日といい今日といい、よくそんな恥ずかしい台詞を真顔で言えますね」

「えっ、いや、それは……えーっと」

昨日自分が言った台詞を思い出して、また顔が熱くなっていくのを感じた。

「今思い出してみるとやはり恥ずかしいですね。『お前には笑って

「ストップ！ それ以上言わないでくれ。余計に恥ずかしい」
ハクはため息の後にジトツとした視線で応える。

「コク様は天然なのですね。ジゴロですか？ それともたらしですか？」

「いや、俺はどっちでも」

「天然ジゴロですね」

「いやいや、今の俺の回答のどこにジゴロな要素が入ってたんだよ。そもそも俺はジゴロの正確な意味知らないんだけど」

言葉を聞き、珍しくハクが微笑んだ。

「気が合いますね。私も知りません」

「何故に！？ 何故意味を知らないのに俺はジゴロにされるんだ！？」

「女の勘ですが……？」

とぼけた表情を見てるとなんだか真面目に会話するのが馬鹿らしくなってきた。

「勘で判断しないでくれ。頼むから」

「分かりました。では勘ではなくコク様の台詞の代表例を明示しながら」

「さっさと行くぞ！」

好ましくない展開に向かおうとする現状を壊すために、ハクの手をぐいぐいと引きながら人ごみの中に歩き出す。

「ま、待ってくださいよコク様」

ハクは引きずられながらも小走りで距離を詰める。

「そんなに急がなくてもいいじゃないですか」

「誰のせいだよ、誰の！」

「へ？ 誰のせいなのですか？ 私には見当もつきませんが」

「お前だよ！ ハク。……まったく。分かっていてやっているんだから性質が悪いよな……」

自分が責められているにも関わらず微笑を浮かべているハクを見て、ため息が漏れる。

コクは苦笑しながらも、**繋いだ手が離れることのないように握る力を強めたのだった。**

第12話 繋いだ手（後書き）

ありがちなラストになってしまいました……。

というか、もう12話目になるのにいまだにまともな事件が起こっていない。

まったく話が進んでくれません。

この調子では主要人物が全員出る前に20話まで行ってしまうかも知れません。

以上が最近の麻道の悩みだったりします。

宿題もやらないといけないし……

いや、でも小説は書くんですけど。

「死神」の方の手直しを同時進行しているので更新ペースがいつもと変わらないわりに内容が少なかったりすると、言い訳してみたり。

ま、頑張ります。

次話投稿は日曜日辺りを予定しています。

第13話 買い物帰り（前書き）

遅くなりましたっ。

第13話 買い物帰り

主に食事の材料を、そして開閉するたびにキィと耳障りな音を出す扉を直すための蝶番ちょうばんや釘くわいなども見て回り、コク達は一時間ほどで目当てのもの全てを買い終えた。

途中、購入したものをに入れて、重くなったバッグをハクが持つことを好ましく思わなかったコクが、「バッグは俺が持つ」と言ったことにより口論になりかけもしたが、人ごみの中で口論するのは拙つたない上に、目立ってしまうのは好ましくないと考えていることもあったか、ハクがあっさりと折れることで事なきを得た。

賑わっている通りを抜けて、コク達は帰路に着く。朝食を食べてそれほど時間が経たないうちに出発したはずだったが、太陽は既に頭上で輝きを放っていた。

「ここまで来ればもう手を放しても大丈夫だろ」

喧騒あそは遠く、辺りには人も疎まばらにしかない。

「そうですね」

ハクが応えると、二人はどちらからともなく手を放した。

「それにしても暑いなあ」

放したことで自由になった手で額の汗を拭った。

コクは頭上を目を細めて見上げる。羊雲があちらこちらに寂しく漂っているが、どれも日光を遮ってくれるほど厚くもなく大きくもない。光は弱まることなく地上を照らしていた。

「暑い」

額に浮かび上がってきた汗を再度手の甲で拭う。

「ハクは大丈夫か？」

隣を歩く、黒いフードを被った少女に声をかける。この環境下で黒いフードというのは相当キツイのではないのだろうか。

ハクは首をコクンと縦に振り、戻すことはせず俯いたまま歩く。

「……大丈夫です」

だが、声には生気がなかった。

「なあ、本当に大丈夫か？ フード取った方がいいんじゃないか？」
ハクは首を横に振る。表情は隠れて見えないが、フードの奥にある顔が辛さで歪んでいる光景は想像に難くない。

「ハク」

コクは先回りして、ハクの前に立つ。

ハクはそんなコクに気付かなかったのか、俯かせた頭がコクの胸にぶつかった。

「……問題ありません」

小さな声で呟くと、コクを避けて行くために脚を横に踏み出した。その時だった。ハクの身体がフラツと揺れてそのまま倒れそうになる。

「危なっ！？」

コクは異変に気付くとすぐに手を差し出してハクを支え、抱き寄せた。

「ハク！ だから言っただろ」

「……大丈夫……」

ハクはコクの胸に抱かれ、荒い呼吸を繰り返している。

フードを剥ぎ取ると、真っ白だったはずの肌は熱で赤く染まり、額には玉のように大きな汗の粒が浮かんでいた。

「くそっ」

どうしてもっと早く気付けなかった。こうなることは簡単に予想がついたことだろう！！

「ちょっと待ってる、今、日陰まで運んでやるから」

「……だいじょうぶ、だから……」

「黙ってる」

ぐったりとしているハクを背負う。

「よしっ」

ハクの身体は思っていたよりずっと軽くて、もしかしたらこのまま消えていなくなってしまうのではないかと根拠のない想像をして

しまつ。

耳ともでは苦しそうな呼吸の音がしている。

「待つてるよ……」

周囲に視線を走らせると、道の先にある原っぱに大きな木がポツリと立っているのを見つけた。木の下は日光が遮られて陰になっており、地面は芝生ふしほどの丈の草が覆っている。人を寝かせるにはちよつとよさそうな場所だ。

「あそこにするか」

そう言つて、コクが歩き出そうとした時だった。

「あ、あんた。ちよつと待つて」

声が聞こえた背後へと振り返る。そこにはこゝろ三十代後半ほどの女性がいた。彼女の名をコクが知る由もないが、この女性はハクが昨日の朝、会つた女性　タルムである。

「なんですか。急いでいるので手短にお願ひします」

コクは冷たい視線を送り、タルムを急せかす。

「あんたの背中の娘、ハクだろ。どうしたんだい!？」

冷静な態度を取っているコクとは対照的に、タルムは相当焦っているようだった。ハクを心配そうに見つめている。

「ハクの知り合いの方でしたか。話は移動しながらでもよろしいでしょうか」

「あ、ああ。なら私にも何か手伝えることはないかい？」

それでは、と言いながらコクは手に持っていたバッグを差し出す。

「これを持っていただけませんか」

「分かつたよ」

コクはバッグを手渡すと、小走りになりながら先程見つけた大木の方へ向かう。早く辿り着くためには走るべきなのだろうが、ぐつたりしているハクに本来不必要なはずの刺激を与えたくはなかった。女性も小走りでコクについて行く。

「それで、その子　ハクはどうして？」

「たぶん熱中症です。この炎天下の中、ずっと黒いフードを被つた

ままで……俺が止めておけば……」

コクは自分が不甲斐なくて唇を噛み締めた。

「そうなのかい、この子……」

タルムはコクに聞こえるか聞こえないかくらいの声量で呟く。「バカだね……」

ハクがフードを被っていた理由。それがタルムには何となく予想出来た。

おそらく、サユであった時の自分を知る人に会って引き止められることによって、自分の主に迷惑が掛かることを避けたかったのだろう。

もしくは昔の自分のことを知られなくなかったのか。

タルムは昨日の朝出会った時のハクを思い出す。あの時のハクは昔の自分を拒絶していた。自分の中に眠っているサユとしての感情を恐れていると言ってもいいかも知れない。

主には昔の自分のことを話してはいないだろう。その状態でサユの時の知人と会うのは好ましくない。

どちらにしても、こんなことにならずに済む対処の仕方があったはずだ。

「本当に、バカだよ。この子は」

タルムの呟きは届いていたが、責任を感じているコクは同意することもなく歩き続ける。

大木の下に達すると、背負っていたハクを根元に寝かせる。

汗で額に貼り付いている白い前髪を手の甲でどける。

「ごめんな……」

浮かんでる苦しそうな表情に後悔の念が押し寄せてくる。

頭を振って気持ちを切り替える。後悔することはいつだって出来るんだ。今やるべきことをやらないといけない。

コクは、隣で心配そうにハクを見るタルムに向く。

「あの、水持っていませんか？」

「水かい？ ちょっと待ちな」

そう言つて、タルムは自分のバッグの中から水筒を取り出した。

「はい、これ」

「ありがとうございます」

コクは水筒を受け取ると、横になっているハクの背中に手を回して、上半身だけを起き上がらせた。

「水飲めるか？」

ハクは荒い息を繰り返しながら頷いた。

水筒の蓋をはずしてその中に水を注ぐ。それをハクの口元に持っていき、傾ける。

こくこくとハクの喉が鳴り、水を飲んでいく。

「……ふう」

「もう一杯いけるか？」

「……うん」

ハクが頷くと共に小さく呟いた。

もう一度水を用意すると、先程と同じようにしてハクに飲ませた。

「……ふう」

水を飲み終える。呼吸も落ち着いてきていた。

「どうする。もう一杯飲むか？」

「いい」

返事を聞くと、ハクを支えていた手をゆっくりと地面に下ろして、寝かせる。

「少し休め」

「うん」

しばらくすると、規則的な呼吸音 寝息がし始めた。

それを聞き、コクは一気に脱力して地面に腰を下ろす。

「はあ、良かったあ」

「本当に。大事に至らなくて良かったよ」

隣で屈んでいたタルムが同意する。

「えっと、水筒ありがとうございます」

コクは手に持っていた水筒を手渡した。

「いいや、このくらい気にせんでもええよ」

「いえ、本当にありがとうございました」

コクは頭を下げた。

「そんなにされるとこっちが恐縮しちゃうよ。私もこの子のことが心配だったんだ」タルムは優しい目つきでハクを見る。「だから当たり前のことをしただけなんだよ」

「それでも、俺はあなたに感謝してます。……あっと、そういえば名前」

「ああ、そう言われてみると、確かにお互いの名前知らないね、私ら。私はタルムって言うんだ、よろしくね」

「俺はコクです。よろしくお願いします、タルムさん」

そう言って、コクとタルムは握手を交わしたのだった。

第13話 買い物帰り（後書き）

遅くなったことの言い訳をさせてもらうと、別の小説を書いていたのが原因で。

「死神」の方じゃなくて、まったく別の小説です。

「箱庭」がひと段落するまでは自重しようと思ったんですが、勢いだけで書いてしまいました。

……後書きなのに活動報告っぽくなってる気がする。

ま、いいです。

「紅い月」ってタイトルにして投稿します。興味があれば見てください。

って完全に宣伝になってますね。これ。

次話は……気が向いたら書きます。

遅くとも来週の月曜日くらいまでには。

第14話 ご近所付き合い？（前書き）

遅くなりましたが、なんとか一週間以内です。

あと、今回の話はR15……だと思えます。たぶん。相変わらず婉曲表現オンリーですが。

第14話 ご近所付き合い？

コクとタルムのそれぞれの自己紹介が終わり、その後はハクが起きるまで雑談をして過ごすことになった。

話していくうちに、互いの家の位置がそう遠くなく、”ご近所さん”であること、言い様によっては”お隣さん”であることも分かってきた。”お隣さん”と言うのはコク達の住んでいる地域には家があまりないため、それぞれの家の距離は相当あるのだが、間に家を一軒も挟んでいなかったからなのだが。

話題は家のことから移り、二人の唯一の共通する知人であるハクこう表現するにはコクとハクの関係はいささか不適切だがこのことになっていった。

タルムはコクの手にはまっている黒い腕輪をちらりと一瞥して、言う。

「あんだ、ハクの主なんだろ」

「はい。これですか」

コクは気まずそう苦笑いをして、その黒い腕輪を挙げる。

「ああ。それで、ハクはどうだい？」

コクはその問いかけに何と答えるべきか戸惑う。無茶ばかりしているから心配だ、と答えようとしたが、それはハクの主の回答として不適切なのではないかと思いつまる。

「……どうしたんだい？ 難しい顔して」

「いえ、なんでもありません」

微笑を作り、応える。

ハクにも注意されていることであるし、ここは主として回答すべきなのだろうが、ハクを奴隷として見ていないコクには荷が重い。何を答えればいいのか分からないのだ。やはり、正直に答えるべきなのだろうか。

「あの、さっきの答えなんですけど」

「ああ、それで？」

「どうかと言われても、俺は正直なところ奴隷ってモノにそんな詳しいわけじゃないですから、よく分からないんですよ」

「確かに、実際あたしも奴隷が何をどこまでするのか、とかは知らないんだけどさ」

「そうですか……」

コクは内心で『考えて損したな』と呟き、その影響なのか表情は不満そうなものになっていた。

タルムはばつが悪そうに苦笑しながら言う。

「やることの限度を決めるのはあんただから、やっぱりあんた次第なんじゃないのかね」

「そうですね。……俺個人の考えとしては、ハクは一人で抱え込んで働きすぎだとは思ってますけど」

「あの子は真面目だからねえ」

遠い目をして、独り言を呟くように言う。

まるでハクのことを前から知っているかのようなタルムの態度に、コクは疑問を抱いた。確か、昨日が初対面だったと言っていたはずだが……。

「タルムさんって、ハクとは昨日が初対面なんですよ」

「ああ、そうだけど。どうかしたのかい？」

「いえ、ハクのことを前から知っているような話し方だったので」

タルムは怪訝けげんそうに眉をひそめた後、先程のことを思い出したように愛想笑いを浮かべた。表情の変化の間に一瞬だけ気まずそうな顔になったことをコクはしっかりと確認していた。

「昨日会った時に『何よりもまずは主を優先する』って態度をとっていたからね、あの子。てっきり生真面目な性格だと思っていたんだが、違うのかい」

「いえ、合っています」

話さないのには相応の理由があるのだろうと思いついて、コクは深く追求しないことにした。

「なんにしても、ハクはあなたの奴隷なんだから、あなたが無茶させたくないと思うんだったらストッパーになってやることだね。あなたの命令には逆らわないだろうし」

「ええ。そうなんですけどね」

コクは煮え切らない表情で返した。

「何かあったのかい？」

「いつもは普通に従ってくれるんですけど、どうにも譲れない一線というものがあるらしくて……」

タルムは疑問の表情を浮かべる。コクは苦笑を返しながらハクを見つめる。

「今日のフードの件とか……取れって言ったんですけど、譲らなかつたり」

「あつ。……確かに、そうだね」

「他にも、俺がハクに奴隷として接していないことが気に入らないらしくて」

二人は視線が交錯し、なんとも言えない苦笑を交換した。

「真面目なハクのことだからねえ。まったく、真面目すぎるってのも問題だね」

「そうですね」

コクはため息と共に応えた。

「……話はそれるけど、気になったこと一つ、訊いてもいいかい」「なんですか」

「あなた、奴隷としてハクを買ったのに、どうしてそんなにハクのことを考えてくれるんだい？」

そして、コクから眼を逸らす。

「いや、答えにくいことなら答えなくてもいいんだけどね」

「答えにくいこと？ と一瞬、疑問に思ったコクだったがすぐにその意味を理解する。すなわち愛玩用か、あいがんということだ。

気付いたコクは慌てて首を左右に振って否定する。

「い、いやいやいやいやいや。違いますよ。違いますからね」

過敏な反応にタルムはかえって疑わしげな眼を向けた。

「本当かい？」

「本当ですって」

「一つ屋根の下で、二人だけなのに？」

「もちろんです！」

「……そこまで頑なに否定されると、ね」

タルムはハクを哀しげに見つめて、頭を優しく撫でた。

「この子が可哀想になってくるだけだ」

「うっ」

コクは苦い表情になる。

「へえ。意外に効果ありなのかい」

「……はい。同じようなこと、今朝言われたばかりですから」

「ハクに？」

「はい」

「ま、いいや。あんた変な気を起こさないように我慢しているみた
いけど、年頃の男だからねえ。どうしようもなくなった時はちゃ
んと同意の上でするんだよ」

コクは、何故か慈愛に満ちているタルムの視線に戸惑う。

「い、いやちよつと待って下さい。俺はしませんよ、そんなハクを
傷つけるようなこと」

「『俺としろ』って命令すればいいだけの話かも知れないけどね。

する時はちゃんと今後のことも考えるんだよ」

「いや、だから」

「もしもの時はあんたが面倒見てあげるんだよ」

「スルーですか！？ 俺の話してるのに、俺の意見無視ですか！？」

「……ふざけるのもこのくらいにしておいて」

「出来ればもつと真面目にお願いします」

コクはジト目を向けて不満をアピールする。

「まあまあ。これで私の心配の種が一つ減った……のかね。微妙な
ところだけど、あんたはそれなりにハクのことを考えてくれてる

みたいだし、いいや。んで、話を戻すけど。あんたはどうしてハクのこと、奴隷として扱わないんだい」

「色々と理由はあるんですけどね。でも一つ言わせてもらおうとすれば、俺が自分の意思でハクを買った訳じゃないんですよ」

「そうなのかい？ あたしはてつきり、あんたがそういう年頃だから……ねえ？」

「いやいや、俺に同意を求めないでくださいよ。そもそも俺、どうしてハクが俺の奴隷になってるのか、すら知らないんですから」

「は？ あんたの親が買ったんじゃないのかい？」

「いやいや、違いますよ。……俺が記憶喪失って話しましたよね」

「ああ。そんなこと言ってたね」

「そんなことつて……そんなに軽い事実でもないんですが。はあ……ま、いいです。それで、俺は記憶を失って、気付いたらハクがいたって感じです。ハクに訊いてもよく知らないって言うし」

「なんなんだい、そりゃ？ わざわざ奴隷買ってあんたに与えて、買った奴に何の得があるって言うんだい」

「俺だって知りたいですよ……」

「ごもつとも、だね」

そう言っただけでタルムは笑い、コクは深いため息を吐くのだった。

第14話 ご近所付き合い？（後書き）

雑談だけで一話が終わってしまった……

なんか、すみません。

次話投稿についてなんですが、8月の終わりごろか9月の初めになると思います。

今も18日提出の宿題に追われている状況で……。

18〜24は特別授業とか部活の大会とか色々忙しいので無理っばいです。

25、26、27辺りは僕個人の勝手な都合になるんですが、友人と自転車の旅をすることになっているのでPCを使うことすらできない状況です。

あとは夏休みの宿題の残量が問題になってくるんですが、9月の始業式の次の日から二日間には宿題テストとかいうヤツに翻弄される予定なので、最悪それがおわってからになります。

第15話 ノイズ（前書き）

遅くなってすみません。

相変わらず話は進まないんですが、どっぞ。

第15話 ノイズ

身体は暗闇の中をふわふわと漂っていた。

夢を見ている……。

コクに出会ってからハクが夢を見るのは二度目だが、そのどれもが悪夢ではない。

奴隷になってからの一年、ほとんど毎日悪夢ばかり見ていた。いつだって”あの日”のことを思い出して後悔するのだ。

『どうすれば良かったの？ どこで間違ったの？』

過去を変えることなんて絶対に出来ない。現実おしぎはなしは御伽噺のように都合よく出来てはいない。

それが分かっているにも、悩んで自問した。

『何がいけなかったの？ 何が失敗だったの？』

口では昔の自分を捨てたと言っているにも、捨てることなんて出来ていなかった。奴隷である私が人間として苦しんでいた。

なんて非生産的な時間。

心身を休めるための睡眠は、精神を疲労させるだけだった。安らぎなど存在し得なかった。

でも今は違う。

思考と同時、周りに広がっていた暗闇は一瞬で白く明るく染まった。

眩しくて反射的に目を閉じた。

過去に囚とらわれ、自分のことだけを考えていた私は変わった。知らず知らずのうちにコク様のことはかり考えるようになっていた。

『コク様のためには何をすれば良いんだろう？ コク様はどうしたら喜んでくれるだろう？ コク様は私に何を求めているのだろう？』

自分のことだけを考えて一年間生きてきた私がどうしてここまで変わってしまったのか、明確な理由は分からない。

コク様がどこか危なっかしい気がするからなのか、自分の身の安全が確保するまでもなく用意されいるために殺されることはないと分かったからなのか、それともこの村に帰ってきて気が緩んでいるのか…………。

もちろん自分が一番大切なのは変わらない。変わらないはずだ。けれど、長い間空席だった二番目の座に今はコク様がいる。

その感覚はどこか新鮮で、懐かしかった。

ハクは夢の中だけに存在する目蓋を持ち上げる。既に世界は白ではなく、有色の光景が広がっていた。

家の台所。足りない身長を補うために台の上に乗って、包丁を握っている。目の前にあるのはまな板とその上に置かれた野菜。足元はしっかりとしているはずなのに、気分は何故か夢見心地で、先程までの闇の中を漂っていた時と同じように身体がふわふわと浮かんでいるみたいだった。

手に握っている包丁をぼんやりと眺める。

「お姉ちゃん…………？」

後ろからかけられたその言葉の意味を咄嗟に理解することはできなかった。

「誰？」

包丁をまな板において、振り返る。

「私に決まってるでしょ。声で分かるでしょ、お父さんじゃないって」

そこには、ニコニコと楽しそうに笑う小さな女の子がいた。髪は所々に灰色が混ざった白髪、肌も白い。くたびれた感じの少し大きめのワンピースを着て、手を後ろで組んでいる。

理解できなかった。

なんでこの子がここにいるの？

「ねえ、お姉ちゃん。どうしたの？ 早くしないとお父さんが帰っ

てきちゃうよ。時間なかったら私も手伝うよ?」

「なん、で……?」

なんで妹がここにいるの?

「なんでって、お姉ちゃんが言い出したことですよ。今日はお父さんの誕生日だから、お父さんの好きなものいっぱい作ってあげようって」

求めていた答えが返ってくることはない。

思考は独り言のように口から漏れ出ていた。

「どうして。なんでミユがここに。お父さんが帰ってくる? なん
で生きてるの。だって死んだって……」

頭の中がヒートする。熱い。痛い。分からない。理解できない。

疑問がぐるぐると巡る。身体がふわふわする。

「ねえお姉ちゃん! 本当にどうしちゃったの!？」

「わか、らない……」

言葉は質問に対する回答ではない。この状況が『分からない』。すうっと意識が遠のいていく。身体がだるくて、自分のものではないみたいだった。

台の上から倒れる。しかしそのことがどこか他人事のように感じられて……

意識を手放した。

再び、ハクは暗闇の中を漂う。ヒートした頭は稼働の放棄によって冷やされて正常へ復帰する。

夢は現実と接してはならない。明確に区分されなければ夢は夢たり得ないからだ。現実との誤差を認識し疑問に思ってしまった時点で、それは単なる思考へと成り下がる。

ゆえにハクの脳は無意識下で自身を問いただす。過去か現在か。体験か回想か。

深層心理は一時的な現実からの逃避を選択し、過去の追体験が開

始される。

世界は白く染まり、やがて色を取り戻していく。

睡眠から覚めて、働かない頭でぼんやりと天井を眺める。ベッドに寝かされていた。

「起きたのかい」

声のした方に視線を向けると、ベッドの傍らに置かれたイスに座った男性が、こちらを優しげな顔で見つめていた。彼の手には読みかけであるう本が開かれている。

「お父さん……？」

起き上がるうとして身体をもそもぞ動かしていると、父の手が肩にそつと添えられる。

「まだ動いてはいけないよ」

「ん？ なんで」

首を傾^{かし}げて疑問を表現する。

「まだ熱があるからね。サユは自分が倒れたこと、覚えていないのかい」

父はそう言うと、肩に置いていた手を放す。

「よく思い出してみなさい、サユはどうしてここで寝ているのか」
曖昧な記憶を辿り、思い出す。

「……………私、倒れたんだ」

「思い出したね」

「ごめんなさい、お父さん」

申し訳なくて、視線を逸らした。

「謝る必要はないよ。風邪なんだ、仕方がないことだよ」

「うん。……………お父さん、それで夕食は？」

「ミユが作ってくれたよ。ちよつと焦^こげちゃってたけどね」

父は苦笑交じりの微笑を浮かべた。それを見ていると嬉しかったけれど、悲しかった。

「ごめんなさい。今日はせつかくお父さんの誕生日だったのに」

「……あ、それでミユがあんなに張り切っていたのか」

「本当は私がいっぱい作るはずだったのに」

「そう落ち込むことはないよ。また風邪が治ったら作ってもらおうから。それにお父さんは自分の誕生日よりもサユの身体の方がずっと大切だよ」

「うん。……分かった。早く治して、それから作るね」

「それでよし」

父は優しく頭を撫でてくれた。

「何か食べたいものとかあるかい」

「ううん、ない。でも喉は渴いたかな」

「分かった。取ってくるから待っていてね」

父は手に持っていた本をイスの上に置くと、部屋から出て行った。

「また、迷惑掛けちゃったな」

小さい頃はたくさん迷惑を掛けた。

ミユが生まれて間もない頃、母が死んだ。父はミユを男手ひとつで育てなければならなかったために掛かりつきりになっていて、私に構ってくれる暇なんてなかった。

でもそんなことが分からなかった当時の私は、父の気を引けるように我が儘ばかり言っていた。そしてミユを敵視した。『あいつはお母さんもお父さんも私から奪っていったんだ』と。

父はミユの世話で忙しいにもかかわらず、私のことも気にかけてくれた。今ならその大変さが分かる、分かっているつもりだ。

だから父の役に立とうと頑張った。楽をしてもらえるように努力した。

それなのに……結果がこれでは意味がない。

部屋の扉が開いて、水を持った父が帰ってきた。

「はい、これ」

「ありがと、お父さん」

起き上がって、水を貰う。喉をコクコクと鳴らして飲んでいく。

「…………ふう」

空になったコップを父に返して、また寝転がる。

「ごめんなさい、迷惑ばかり掛けて」

父は言葉を聞いて、微笑んだ。

「迷惑ではないさ。昔のように甘えてくれてもいいんだよ」

「うん、だって」

「サユ」父は柔らかな言葉遣いで遮る。「親というものはね、いつまでも子供には甘えてもらいたいんだ。確かに昔は大変だったけれど、楽しかった。今は二人とも手が掛からなくなって、お父さんはちよっと寂しいんだ」

「うん、分かった。…………けど、ミユの前だと恥ずかしいから…………今、

その…………手…………」

「繋ぐ？」

「…………うん」

コクンと小さく首を縦に振る。

手を指しだすと、父は大きな手で優しく握ってくれた。手を握られているだけなのに全身が包み込まれているような気がした。安心感が胸を満たす。

眠気はすぐにやってきて、目蓋を開けているのも億劫になってしまう。

「お父さん、おやすみなさい……………」

「おやすみ」

父の声が聞こえて、目を閉じた。

第15話 ノイズ（後書き）

夢の話ですね。ハクの過去をちょっと書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0770m/>

箱庭の中 In the World of Servant

2010年10月8日13時52分発行